

見える少年と新たに輝
く少女たち

黒ニャンコ先生

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

松浦涼は幼い頃に起きたある出来事をきっかけに、時々奇妙なものが見えるようになった。
なつた。

それは幽霊や妖怪と言ったこの世ならざる者たち……。彼は自分が視えることを秘密にし、普通を装って過ごしていた。

これは内浦に住む人とは違ったモノが視える少年と、それを取り巻く9人の少女たちによるハートフル（時々ボツコとスプラッター）な物語（になればいいと思う）。

目次

ちよつと前のお話

寝ている人を死者の目覚めで叩き起こ

すのはやめろ 1

前速前進ヨーソロー 11

ねーちゃんとシヤイ煮ー 22

マルと狐面とハンバーガー 46

現在のお話

普通怪獣バカみチカ（劇場版）（嘘）

60

極限の、戦い（墮天使編） 84

番外編 やっぱりガチャなんて悪い文

明なのよ！そんなの破壊してやるわ！

94

番外編（2） 伽藍の堂と打ち上げパ

テイー 117

ちよつと前のお話

寝ている人を死者の目覚めで叩き起こすのはやめろ

日曜日。世間一般的にいえば休日。

中には仕事だ社畜だと恨み言をぼやく大人もいるだろうが、そこはそれ。学生のオレには無縁な話だ。

特に部活動に精を出すわけでもなく、日曜朝の惰眠を満喫する。身体を休める事も大切だ。

「……………ん」

故に、誰にもこの惰眠を妨げる権利は無い。

——もし、もしも、仮にだ。

「り……………ん……………ちゃん」

この眠りを妨げる奴がいれば。

「りよ……………ん……………涼ちゃん！」

必ず報いを受けさせてやる。

「起きろ——！ 涼ちゃんあ——ん！」

※

カンカンカン！　カンカンカン！

「おつきーろー！　おつきーろー！　さつきとおつきーろー！」

目覚まし時計なんて生温い。

鼓膜が破れるんじゃないかってくらい甲高い上に五月蠅い騒音に叩き起こされる。

誰だ、どこのバカだオレを叩き起こしたのは。

毛布をズラし、薄く目を開ける。

「あつ、やっと起きた！　おはよ！　涼ちゃん！」

真夏の太陽みたいな笑顔がそこにあつた。

その手にはなぜかお玉とフライパン。騒音の原因は間違いなくソレとこのバカだろ
う。

「……おい」

「なに？　涼ちゃ——ひえっ!？」

低く、ドスを利かせた声で呟く。

その声にまふまふと耳を近づけていたバカへ、素早く毛布を投げつけ視界を塞ぎ、驚いている間に背後へ回り込み膝裏を軽く打って姿勢を崩させてから手早く関節技と締め技をかけた。

「いたたたいたたああ?!? 痛いよ涼ちゃん!」

「五月蠅い黙れバカみかん。無断で家上がった挙句人の惰眠を妨げやがって!」

喚くバカみかんがタップしてくるが、知ったこつちやない。

だいたいがあんな物で起こすという考えがおかしいだろう。オレでなくても不機嫌になる。

「お、おばさんたちに挨拶したし、涼ちゃんに頼みがあつたからいつたあああい?!?!?」

「生憎と当方はアポイントメント制となっております。面会を希望の際には前日に取り付けるバカヤロー!」

「うわあーん! ごめんなさいー! チカが悪かつたですー!」

泣きながらの謝罪。

まあ、今回はこの辺で勘弁してやるか。こいつの突発性は今に始まった事じゃない。

——いい加減学習しろとは常々思っているが。

※

「……なんで？ 人の安眠を妨害してまで何の用事だ《カンカンみかん》」

「それチカのこと!？」

お前以外誰がいる。そもそも自業自得だろうこんなあだ名。

変な呼び名でガアンツ！ とシヨックを受けているこいつは、《高海千歌》。残念な事にオレとは腐れ縁で所謂幼馴染みの関係にある。

明るいブラウンのショートカット。両サイドには左側を三つ編みにしてリボンを結び、右側にはヘアピンをつけている。

性格は……一言で言うなら『単純バカ』か。真っ直ぐ一直線な奴だ。

そしてオレは《松浦涼》。特技は元米軍特殊部隊の出身を自称する変なオッサンから教えてもらったCCC。あと公にできない秘密もあつたりするが、それはまた別の機会にするでしょう。

とにかく話を戻して、一体全体朝っぱらからなんの用だコイツは。

「実は……涼ちゃんにとっても大切なお願いがあるので……」

かんか……バカみ……じゃない。チカにしては珍しく神妙な表情に、オレもそれとなく居住まいを正す。

神妙な表情を崩さないまま、チカはゆっくりと口を開いて……………

「——チカに勉強を教えてくださいお願いします！」

「……………あ？」

パンツと両手を合わせて拝み倒してきたチカに、たつぷり間を空け呆けるオレ。

「明日提出する課題があったの、すっかり忘れてて……あはは」

「……オレじゃなくて他に頼めば良いだろう。ヨーソーロいやねーちゃんはどうした」

「曜ちゃんは練習、果南ちゃんも手伝いがあるから……」

「じゃあお前んとこのねーちゃんに……いや頼んでいたらそもそもオレんここにこねーわな」

言いかけた言葉を飲み込む。

どうせ自分でやれとかそんな事を言われて、だからと言って自力じゃできないからオレに助けを求めてきたって所か。

「助けてよ涼ちゃん〜！ このままだとチカ、1週間補習なんだよ！」

「自業自得じゃねーか。つかなんでオレなんだ？ オレ別段頭良くねーぞ」

「チカよりは頭良いよ！」

返す言葉もねーなあそれ……。

さてどうするか……朝っぱらから叩き起こされていきなり今日の予定が狂ったが、かといって特に予定らしい予定は立ててない。だからコイツの勉強を見てやることもできる……が。

そもそもさつき口にした通り完全にコイツの自業自得なワケで、おまけに学校が違う（チカは浦の星女学院という女子校に通ってる）から関係ないと突き放す事もできる。……そうなるとそれはそれでもう1人の幼馴染みとねーちゃんがなんか言うだろうからなあ……2人揃って甘いだろチカに。オレも人のことは言えねーんだけど。

「……………はあ」

軽く嘆息し、チラつとチカを見る。そんな子犬みたいな目で俺を見るな。

「——わーったよ、やりやあいんだろ、やりやあ」

「ホントに!?!」

「けど先に朝飯食わせろ。その間できる所まで自分でやってろ」

「ありがとー涼ちや——きやいんっ!?!」

感激のあまり飛びついてこようとしたチカ。

が、さつき紹介したとおりオレはCQCが使えるわけで、おまけにそんな突発的に来ると条件反射的に身体が動いてしまう。

長年染み付いた習慣は恐ろしいと言うべきか、あつさりとチカをいなして床に叩き伏せてしまうとそのまま腕を捻り背中に押さえつけてしまった。

「いったあああああ!？」

近所一帯に聞こえるんじゃないかってくらいチカの絶叫が響く。ただご近所さんは一種の日常的な光景と認識してくれているのは有り難い。オバチャンが「あらーまたチカちゃんも涼ちやんに投げ飛ばされたのかしらねー」なんて天気の話をするみたいに気軽に出てくるくらいには。

はっと我に返って技を解くと、チカはグロッキー状態になって今にも口から魂が抜け出ていきそうになってる。

しまった、やりすぎた……意識しているならまだしも無意識の反射だと加減できないんだよ。

「あー……ワリイ。つい反射的だったから加減できなかつたわ」

「涼ちやんの……お、に……ガクッ」

さすがに罪悪感も湧いて謝罪する。

チカは恨み言を吐いてダウンしてしまい、暫く起きそうにない。

……朝食の終わるまでこのままにしておくことにして、床で寝かせるのは忍びないのでチカを抱えるとベッドに寝かせる。

さて、朝食食いに行くか……つてかあるかな。なけりや自分で用意しなきゃいけないだけだ。簡単なものならオレでも出来るし問題はないけどな。

※

幸い朝飯は残っていて、適当に残り物で済ませて部屋に戻るとチカはまだ寝ていた。ノックダウンさせた罪悪感から少し寝かせておいてやろうと比較的ゆっくり食べたきたつもりなんだが……いい加減起こしてやんなきゃいけないよなあ。

「だからって普通に起こしても起きないんだよな、コイツ」

ならどうやって起こすか……と考えようとした時に足に何かが当たって、目を落とすとフライパンとお玉が転がっていた。

そう言えば母ちゃんが「千歌ちゃんがお玉とフライパン持って行つた」つて言つてたから、これは家のなんだろう。

「……………うし」

どうしてやるかを決め、落ちてるフライパンとお玉を拾い上げる。

標的確認、距離算出——攻撃、開始！

カンカンカンカンカンッ！

「わっひゃあ!？」

耳元で甲高い騒音が鳴り響き、眠っていたチカは一瞬で覚醒して跳ね起きる。

「はっ? えっ? ここどこ? 涼ちゃん?」

「さっさと起きて準備しろ。勉強教えてもらいに来たんだろ」

「勉強……はっ! そうだった!!」

起きたばかりで状況が掴めていなかったチカだったが、オレの一言でようやく来た目的を思い出す。

ベッドから飛び降り、バッグから教科書とノートを出してテーブルに広げ、あと思いついたように棚の上に飾っていた黒いブタネコみたいなぬいぐるみも持ってきて膝に乗せた。

「好きだよなあ、お前。そのぬいぐるみ」

「えへへ……だつてかわいいもん」

「そんなに好きならやるって言ってるのに……」

このぬいぐるみはかつてゲーセンでオレが獲ったもので、俺も持っている漫画に登場するマスコット……? みたいな奴だ。正確に言えば少々違うが。

それでこれを見たチカがなんだか気に入ってしまい、以来家に来たときは大抵この黒ニャンコを抱えている。

「いいよ、涼ちゃんが獲ったものなのにチカが貰っちゃ悪いもん。それにチカの部屋にあつたらいつも持つてそうだし」

「さいで。んじゃちやちやと課題片付けるぞ。課題なんか1日潰したくない」

「ヨーソロー!」

それ曜の口癖だろ……まあオレたちにも伝染しているんだけど。

さて……果たしてチカの持つてきた課題が俺でも対処できる奴なのか。ダメなら……諦めるつきやねえか。親友のよしみで骨は拾ってやるよチカ。

前速前進ヨーソロー

オレが朝は早起きだと言うと、大抵の人間がなぜか驚く。……まあ理由は分かっているけどな。不良に見られがちなおレが早起きって言うのは。

もちろんおレは素行不良を謳歌しているつもりはないし、学校にはきちんと登校し授業だつてそれなり真面目に受けている。試験の成績も中のやや下と普通レベルだ。

……いや、なんか因縁つけられてケンカになれば買うけどな。もちろん正当性を主張するためにわざと先にやられてからやり返すし。

おレが不良に勘違いされるのは大抵そんな事があつてどこかで噂になり、余計な尾ひれや背びれつけて肥大化したのが大概なんだが。

……だいぶ脱線したな。おレが早起きの理由、それは単純に日課のランニングをするためだ。

このランニングは基本的に月曜～土曜まで毎朝欠かしていない（さすがに天気が荒れていれば控えるが）。現在となつてはほぼ独学で鍛錬をしているCCCの技術に不安を抱く以上、少しでも体力をつけて補わなければと言う理由にある。

学校指定のジャージにスポーツタオルなどを入れたウエストポーチを腰につけて家を後にし、そのままいつもの道を走っていく。

「おっ！ おーい、りょーくーん！」

「あ？ なんだお前か」

途中、背後から声をかけられてすぐに誰かが横を併走してきた。

こいつは『渡辺曜』。チカの奴と同じで俺の幼馴染み。毛先が軽くパーマがかかったグレーの髪が走るたびに揺れている。

『『お前か』、ってちよつと素っ気ないなあ。せつかく見つけたから声をかけたのに』

「別に示し合わせてるわけでもねーだろ。おまけに何年お前やチカと顔を合わせてきたと思ってるんだ」

「まあ確かに、りょーくんがそういう性格だつて言うのは知ってるけどね」

ぞんざいな反応に曜の奴はむっと頬を膨らませる。

けど曜に言ったとおり、別にオレたちは約束をしているわけでもない。ただ偶然出くわし、そのまま走っているだけだ。

曜がランニングをする理由は……まあオレと同じく体力作りが目的って言えるか。

こいつは高飛び込みの選手をやっていて、おまけに実力はナショナルチームレベルと地元の星みたいなのだった。確か強化指定選手に選ばれたんだっけ？

で、趣味は筋トレと体育会系のスポーツ少女だ。

「あ、そうそう。千歌ちゃんの課題手伝ってあげたんだっけ？」

「まーな。めんどくさかったけど」

つい先日のことを思い出す。

あのバカみかんが朝に急襲して叩き起こしやがって、課題終わらせるのを手伝ってくれとか頼んできた。

範囲は幸いにもオレでも解ける場所だったから俺が教えてあいつが解いて行って、どうにか間に合ったんだが。

「つかその話、チカがバラしたんか？」

「うん。『涼ちゃんのおかげで放課後補習地獄に遭わずに済んだんだー』って嬉しそうに話してたよ」

「人の情眼をぶち壊しておいて暢気なみかんだな、おい」

「まあまあ、叩き起こされたくらいでそんなに機嫌悪くしなくてもいいじゃん」

そう宥める曜だが、お前はあの威力を知らないからそんな事が言えるんだ。眠っていて完全に気が抜けている時にあんな死者の目覚めで叩き起こされてみる。オレでなくてもキレるだろうが。

「だったら今度、曜の部屋に忍び込んで寝ているお前の耳元でフライパンとお玉叩きま

くってやろうか。さぞ素晴らしい目覚めになるだろうさ」

「寝ている女の子の部屋に忍び込むなんて……りょーくんのエッチ」

「今すぐ投げ飛ばしてやろうかおいら」

「わわっ！　じ、冗談だってば！　本気にならないでよ！」

じとつと汚らわしい物を見るような目でオレを見た曜対し、オレは淡々と答えた。

オレはやる時にはやる。いや、寝ている女の子の部屋に忍び込むのはやらないが、女が相手だろうと遠慮なく投げる、絞める、極める、殴る。特にチ力は骨身に染みてる……から学習しているはずなのに、なんで同じ事を繰り返すんだろう。

慌てて謝る曜の目には確かな恐怖が浮かんでいた。具体的な例（バカみかん）を間近で見続けてきたし、こいつ自身何度か地獄を見ているからな。

ならいーんだよ、と鼻を鳴らしてこの話題は終了。話し込んでいて遅くなったペースを取り戻すために足を動かす速度を速める。

すると当然のように曜も走るペースを上げて追いつき、また隣を併走していた。

「置いてかないでよー！　行き先はおんなじなんだから一緒にいいでしょ？」

「オレは1人でも構わねーよ」

「……そんなだからりょーくんは友達が少ないんだよ」

さらりと酷いことを言う曜だが、それを否定もできないから苦い顔を浮かべるしか

い。

不良に目をつけられ、結果善良な一般生徒からも遠巻きに見られてつから学校に友達と呼べる人間は……ああ、いねーなほぼ。

おまけに——

「あつ！ おはようございませう松浦のダンナ！」

「おう」

「えつ、あつさり肯定しちゃった……!?」

背中に甲羅を背負い、頭に皿を載せた全身緑のカツパみたいな人間——“みたい”、じゃなくて正真正銘マジモンのカツパなんだが——が水かき状の手を上げて挨拶してきた。

ちようど曜が言った後に声をかけてきやがったから肯定する形になってしまい、オレは即座に「ちげーよ」と否定する。

曜には今さつきすれ違った“モノ”は視えていない。そもそもこの世界にアレが見える人間がどれほどいるのか。

——オレは小さかった頃、ある事故が原因でヘンなモノが視えるようになった。

それは昔から伝わる妖怪とか幽霊とか、とにかくそう言ったこの世ならざる物と言ったほうが良いだろう。

「へえーすごい！」って思ったお前、バカだろ？ 当事者としては面倒でしかねーんだよ。ただ偶然視えただけで生意気だとか言つて襲いかかった妖怪に何度遭遇してきたか。

まあ、あのカップは悪い奴じゃない——と言うか頭の皿が乾いて倒れていたのを助けて以来恩人だとかで慕っている——し、オレの知り合いの妖怪は基本的に根は良い奴だから。

「友達が少ないは否定しねーが、ハッキリ言うんじやねーつての。投げ飛ばすぞ」

「ああ、やつぱり気にして——いえなんでもないです！」

ジロリと半眼で睨みつけると、言いかけていた曜は慌てながら否定する。この辺りはチカより物分りが良いと言うか、察してくれる。

「ならいい。さっさと行くぞ」

「おつ、それはもしや競争つてこと？ 勝負なら負けないよっ！」

「ちが「全速前進！」 ヨーソロー！」……人の話は最後まで聞けつてんだよ！ 《前前船長》！」

だが基本的にはチカの同類である事には変わりなく、ひとたびスイッチが入れば手がつけられないのは一緒だ。

勝手に話を進めた曜は敬礼してからグンとスピードを上げる。オレの突っ込みを最

後まで聞きもせず。

ちなみに《前前船長》とは曜が昔「全速前進」と「前」速前進」と間違えて書いた事に端を発するもので、そこに父親がフェリーの船長と言うのも合わせて出来上がった物だ。

ただ、あながち的を得ているなど我ながら思う。曜も猪突猛進な所があつから。今のように。

いやそれより、あのバカテンションハイになつていつものゴール地点すつ飛ばさねーように早く追いつかねーと！

※

「ゴメンゴメンゴメンゴメン！ 謝るから！ 悪かつたから許してえ〜！」

「それでこつちの気が済むと思つたら大間違いだつっーの」

ランニングのゴール地点であるロープウェイ乗り場（現在は老朽化で止まつてる）、その下でオレに関節技をかけられて悲鳴を上げている曜。

あの後なんとか曜に追いついたが、体力ががつつり持つてかれて息も絶え絶えだった。

それでもどうにか、曜への怒りを原動力にして辿り着き、腹いせで曜を締め上げている。

……傍から見れば女の子を息を荒くして襲っている男にしか見えねーなこれ。人がいなくて助かった。居てもここで働いている人が殆どだから「ああ、またか」みたいなノリで生暖かく見守ってくれてっけど。

「別に悪気があつたわけじゃなくてっ、ついテンションが上がっただけなんだよっ！」
「悪意があつたらな悪いわ」

こうしてからそれなりに時間が経ったから、もう十分かと判断してようやく曜を解放する。

解放された曜はへなへなとその場にへたり込み、涙目でオレを見上げてきた。

「りょーくんの鬼、悪魔あ……」

「もしそうならオレは容赦なくお前を海に投げていたっつーの」

「……オレのランニングはスピードの向上じゃなくて体力をつけるためだっつ
の。」

オレだって男だし体力に関してとは同年代の男子でもかなりあると自負しているが、曜

もねーちゃんもその上を行く体力バカ（そもそも2人揃ってアスリートだから普段の運動量からして違う）だから一緒にランニングするのははつきり言つて狂気の沙汰としか言いようがない。

はつきり言おう、2人に付き合ったら死ぬ。

「それでもりょーくんつて容赦無いよ。この間も千歌ちゃんのこと気絶させたつて聞いたよ?」

「アレはバカみかんも悪い。いきなり飛びついてきたら条件反射で動くから加減できないんだよ」

無然として曜に答えながらも、心の中では「まあ、半分はオレにも責任あんだけど」と付け加えたんだが。

「つーかチ力は……なんつーの? 無自覚つていう奴? 俺らも高校生だつてのにベタベタと。犬かお前はと。——いや、犬だなあいつ。きつと柴犬。」

「お手とかやつたら普通にやりそうだよな……」

「なにが?」

「いや、独り言」

思わず声に出していたらしい感想を聞いた曜が不思議そうに首を傾げて訊ねてきたのははぐらかして、身体も落ち着いてきたところで自販機でスポーツドリンクを2つ

買って戻ってくる。

その内の一つを曜に渡すと、受け取った曜はありがとうとお礼を言ってからボトルを自分の頬に当てて気持ち良さそうに目を細めた。

「はあー、運動した後のこれって気持ちいいよねえー」

「あとで金返せよ」

「せっかく涼んでる所に水差さないでよー……」

「おかげで余計冷えただろう？」

むーつとふくれっ面になる曜に、くつと低く笑いながら皮肉を投げる。

さあて、戻りもあるんだしあんまりだからだら休憩してるわけにもいかねーんだよな。

そう考えながらオレはプルタブを空けてぐつと缶を傾けた。

「——ふいー……。おら、いつまでも座ってねーで立てよ。置いていくぞ」

「えっ?! ま、待って私まだ飲んでない!」

さっさと飲み終えて空き缶をゴミ箱に投げると、そのままさっさと走り出す。

まだのんびりしていた曜は慌てて缶を開けて中身を飲むと、ゴミ箱に入れて大慌てて追いかけてきた。

「待ってよりよーくん! 先に行かないでってばー!」

「因果応報、自業自得だパーカ」

そもそも曜を待ってたら確実に学校に遅れる。内浦には高校が無い……わけでもないが、曜たちが通うのは浦の星女学院。つまり女子校だから男のオレが通えるはずがねーし。

そんなわけでオレは学力と移動距離を考慮（それでもメツチャ遠い）して選んだ、街の方にある高校に原付を飛ばして毎日通ってる。

要するに、曜に構ってる暇なんてねーってことだ。曜だけに……うっわこれチカと同じレベルじゃねーか最悪。

……こんなバカやってねーで早く帰るか。

ねーちゃんとシャイ煮ー

「えー、急だが天候の悪化で今日の部活は中止、完全下校になった。と言うことで全員ホームルーム終了後真っ直ぐ帰宅するように」

担任の説明を聞き流しながら窓の外に映る風景を見遣る。昼ごろから空はどんよりと曇りはじめ、6限は終わる頃には雨風が激しくなっていた。

そんな中にSHRでの担任からの報せにも、「まあ当然だよな」と一人納得している。そもそもオレには関係の無い話だ。部活に所属しているわけでもなく、授業が終わればそのまま帰宅――

「それと松浦、お前は国道414号線を使っていたな？」

「え？ そうっすけど」

「海岸沿いの道は高波の危険があるので通行止めだ」

「あー……」

そりやそうだ。いつも通学に使っているあのルートは完全に海沿い。こんな悪天候にあの道を走れば確実に波に飲まれる。

なら迎えに来てもらうか、あるいはバスと言う手もあるんだが……きつとバスも人で

ごった返すだろうし。

「どうする？　もし帰宅が難しいなら学校に泊まれる手続きをするが」

「いや、それは勘弁してください。全力で断ります」

学校に寝泊りなんてそれこそ正気の沙汰としかいえないだろう。いや、普通の人間なら気にしないだろうが、オレみたいな人間が泊まれば確実にヤバイ。

となったら親に迎えを頼むか、大きく迂回して帰宅か……。まあ最初に聞くのは親だよな。

「とりあえず親に迎え頼めるか聞くんで、電話してもいいですか？」

「ああ、構わないぞ」

一言担任に断りを入れ、スマホを取り出して電話帳から母親に電話をかける。

「あー、もしもし？　オレだけど。悪いけど迎え頼める？……ねーちゃんからも迎え頼まれてる？　じゃーオレ後でいーわ。ん、わかった」

「親御さんはなんだって？」

「迎えに来てくれるって行っていました。迎えが来るまで学校に残ってても良いですよね？」

「ああ。他にも迎えを頼んでいる生徒がいるからな」

そうと決まれば有り難い。原付を置いてくのは不安だがそれよりも身の安全のほう

が優先だ。

けど来るまでどうやって時間潰すか……あ、そだ。久しぶりにマルをからかつてみるか。

善は急げと言う事で、さっそくからかうターゲットにラインでメッセージを飛ばす。

『おーい』

『涼さん？ どうしたの？』

すぐに既読がつき、相手から返信が飛んでくる。

《くきだはなまる国木田花丸》。オレが世話になってる寺の孫娘で、俺の霊能力を知っている数少ない

相手だ。ちなみに1個下で後輩。

『頼みがあるんだけど、今晚そっちに泊めてくれ』

『意味がわからないんですけど?!?!?』

おー、期待通りの反応だ。ここでバラしてもいいんだが、もうちよつとだけ引つ張ってみるか。

『今日嵐だろ？ 国道が通行止めになったから頑張つて迂回して帰るけど、家まで敵しいからいつその事お前んちに泊まる方が手っ取り早いよなあって』

『だ、だからっていきなりはオラも困りますよっ！』

『だよなあ。——まあ冗談なんだけど』

『……涼さんは意地が悪いです』

文章でのやり取りだからどんな顔をして言っただかは分からないが、きつと半眼で入力してるんだろうなあって事だけは予想できる。

そもそもレインコート積んでるっていつても、マルの所まで行くにはこの天気と迂回ルートを考えると3時間以上は掛かるんじゃないだろうか。これなら迎えに来てもらう方が安全で早いつて明らかだ。

『とりあえず迎えが来るまで暇つぶしに付き合ってくれよ』

『別にいいですけど……』

こうやって時間潰しに律儀に付き合ってくれる辺り、結構いいやつだ。特に暴走バカ2人と付き合いが長いとマルの方が遥かにマシだと思える。

あいつらも少しは見習って落ち着きを覚えろと。……………無理か。

※

家に帰ったのは7時をとくに過ぎた頃だった。

込んだ。

「なんで？　なんでねーちゃんが裸でいたんだよ!?　つかなんでねーちゃんいるんだ？　じーさんちで暮らしてるはずだろ！　あとあの金髪の人でも誰なんだよ!?　つか思いつきり裸見たんだけど覗きかこれ!?　犯罪？　けど意図していたわけじゃないし冤罪だよなあ!」

頭の中がパニックになって自分でも何を考えているかわけがわからねえ！

「涼！　涼ったらー!」

その時、ドンドンとドアを叩く音に我に返る。

振り返るとほぼ同時にドアが開き、顔を赤くしたねーちゃんが部屋に飛び込んできた。

……バスタオル一枚で。

「ちよっ……なんて格好してんだよねーちゃん!!」

「仕方ないでしょ！　急いでたんだから!」

急いでたからってその格好はねーよ！　いくら姉でも恥ずかしいわ！　いや見てるこつちが恥ずかしいってのもヘンな話だけど！

「いや……さっきのは事故だ！　完全に俺の不注意でまさかあそこにいるとは思わなかったんだよ!」

「それはまあ、分かってるよ。涼が堂々と覗く趣味なんて持つてないのは分かっているしキヤラじゃないし。でもほら、鞠莉もあそこにいたし、裸見たことに関してはおちゃんと謝ってよ?」

「わ、わーってるよ……それより早く服着てくれ。目のやり場に困るんだよ」

「ねーえー果南ー? まだウエイティンナー?」

と、視界にねーちゃんの姿を入れないようにしていた矢先、日本語と英語が混ざった言葉と共にさっきの金髪がひよっこり姿を現した。

しかも、ねーちゃん同様バスタオル一枚で。

「ぶふっ——!?!」

「ちよっ、なんで来たの鞠莉い!?!」

「だってー、このままウエイティンしてたら風邪引いちゃうもの。マリーたち着替えがないから果南のブラザーに服を借りるって話してたじゃない」

「そうだけど涼は男の子なんだし、こんな格好で来ちゃマズイって!」

「Oh、ソーリー! でも果南だって他人のこと言えないわよ?」

……なんだこの状況は。ねーちゃんと金髪の女がバスタオル一枚で俺の部屋で言い争ってるって。

だがひとまず、2人の言い分は分かった。俺はわいわい騒いでいる2人を無視してク

ローゼットを空け、適当にシャツやらスウェットやらを2人分引つ張り出して2人に投げる。

「とりあえず服着ろ。話はそれからだ」

「サンキュー！でもショートツがないとヘンな感じ——」

「い・い・か・ら！部屋に行くよもうっ！」

まだ何か言いたげな……えつと、確かねーちゃん鞠蒞つて言つてたっけか？ を強引に引つ張つて部屋を出て行つた。

まるで嵐みたいだったな……なんで屋外と屋内にも嵐が来てるんだよ。

「……………つくしー！」

身体が少し冷えてきて、思わずくしゃみが出てきた。

……頭冷やす意味も含めて風呂に入つてこよう。

※

「——で、なんでオレの部屋にいんだよ」

務めて、可能なかぎり冷静に、オレの部屋で入り浸っている2人に問う。

風呂から上がって部屋に戻ったら、なぜか勝手に入られたりしていれば不機嫌になるのも当然だっつの。

「ごめん、私の部屋って何も無いからさ……」

まあ確かに？ 普段はじーちゃんちで暮らしてるからこつちの家にあるねーちゃん
の部屋にはほぼ何も無い。たまにこつちに帰って泊まる時は着替えなりを持ってきて
るからな。

ねーちゃんはまだいい、百歩譲って許そう。ねーちゃんだけ、ならな。問題はなんで
鞠莉って人もいんだよ。

「あなたが果南のブラザーよね？ 私は小原鞠莉。マリーって気軽に呼んでいいわよ
★」

「……松浦涼っす。さつきは知らなかったとは言え覗いてしまいでーも申し訳ありませ
んでした。で、一応窺いたいんですが、どうしてあんたまでオレの部屋に入り浸ってい
やがるんでしょうか？」

「だってブローイングだったんだもん」

ぶろーいんぐ？ 何の意味だと首を傾げていると、鞠莉とかいう人が「退屈って意味
よ」と教えてくれた。

「私のパパってイタリア系のアメリカ人で、私も何年か海外にいたからまだ英語が抜けきらないのよ」

「あーそーっすか。それでねーちゃんも突然なんでこっちに來たんだよ?」

「母さんから聞いてないの? この嵐で船が出れないって話だから、今日はこっちに泊まることになったって」

……言われてみれば連絡取った時そんなこと言ってたな。けど他にも居るとは聞いてなかったと思うが。

「私と同じで鞠莉も淡島に住んでいて、今日は帰れないしそれなら家に來る? って誘ったんだよ」

「……あそこって民家あったか?」

ねーちゃんが普段住んでいる淡島っていうのは、すぐ目と鼻の先にある小さな島だ。いわゆるリゾート島ってやつで、俺たちのじーさんが経営しているダイビングショップ以外だと水族館やホテルしかなかったはずだが……。

「私はホテルに住んでるのよ」

「はー。」

「驚くのも無理はないけど、鞠莉は本当にホテル暮らしなんだよ。あのホテルって鞠莉のお父さんが経営してるホテルチェーンの系列だから」

驚きすぎて言葉も出ねーよ。いや、俺には関係ないからどうだっていいけど。

とにかく事情は理解した。が、入り浸られるのは困るんだが。

「ホワイ？ 何か不味い事でもあるの？」

「別にないっすけど、遠慮とか気を使ったりするとかあるんで」

「ああ、それならノープロブレム♥ ここはキミの部屋なんだから遠慮する事なんてナツシングよ♥」

………………。無言でねーちゃんを見る。と言うか睨む。

ねーちゃんは無言で手を合わせ、頭を下げていた。

言葉のやり取りはなかったが、そこは姉弟間の言わなくても伝わるやつと言うかそんな感じでねーちゃんの言いたいことが伝わったと思う。

『ごめん、鞠蒞ってこんな子だから慣れて』——と。

だがそう頼まれた所で即座に適應しろってのが難しい話だ。だってオレ、この人苦手なタイプっぽいから。

だからと言ってこんな嵐の夜に出てけと言うほどオレも冷酷非道で薄情者ではない。とにかく震える手を握り締めて抑え込み、どうにか冷静に、れ・い・せ・い・に、なろうと努力する。

「ね…ねえ涼、何冊か漫画借りていいかな？ 部屋で読みたいんだ」

「ええー？ それなら涼の部屋でリードする方がいいでしょ？」

これ以上俺を怒らせたくないよう、ねーちゃんが冷や汗を掻きながら案を出したが、それはあつさりと唇を尖らせた鞠莉のブーイングで却下された。

いや確かに正論かもしれないがそれで男子高校生の部屋に入り浸るって言うのは女子高生としてどうなんだ？ ねーちゃんはまだいい、千歌と曜も許せるが初対面の相手にそれを是とするってフランクすぎないかイタリアかアメリカかっておおらかな国柄だっけそうなんだっけか。

「生憎と俺はアメコミは持ってないんで、クモの能力を得たヒーローだとかパワードスーツ来て悪と戦うヒーローが出てくるような漫画は持ってないですけどね」

「んー、スパイダーマンとかアイアンマンとかってガールズ向けじゃないし。別にそういうのじゃなくても普通のコミックで良いわよ。例えばこれってどんなストーリー？」
「妖怪と人間が共存している町で次々に起きる事件を人間と妖怪の少年少女たちが解決してくってやつすねー」

「じゃあこっちのコミックは？ この……んー……ポークチャイルド？ レコン犬？ これってこのぬいぐるみ……のカラー違い？」

レコン犬ってなんだよレコン犬って。多分ニヤンコ先生と黒ニヤンコの事を指しているんだろうけど。

その漫画はねーちゃんを始め千歌と曜も気に入ってる作品なんだが、鞠莉はぱらぱらとページを捲って眉を寄せてすぐに本棚に戻っていた。

「涼の持つてる漫画って妖怪とか幽霊とかそう言ったテーマの作品ばかりだから、鞠莉の趣味に合うかは……」

「んー……こう、ハートフルじゃなくてとってもエキサイティングがいいんだけど。あつ、これってバンパイアが出てくるの？」

適当に目に付けたタイトルに目を輝かせてページを開く。けど思っていたのと違っていたのか明らかに落胆して元の場所に戻っていた。

「まあ、涼だって男の子なんだし？　こういうのも読みたくなる気持ちは分からなくもないわよ」

「何を考えてんのかはあえて聞かないが、その漫画は確かに最初はそういう描写多いけど終盤の内容完全にバトル漫画っすから」

「できれば最初から激しい感じがいいんだけどー……あ、これって面白そうー！」
そう言っって今度手に取ったのは……あつ。

黒い装束を纏ったオレンジ髪の男が表紙に書いてある漫画を手にとって、パラパラとページを捲っていくうちに段々目を輝かせていく。

確かにこの漫画なら好みに合うかもしれない。しれないんだが……。

「面白いじゃないこれ！ うんうん、とつてもエキサイティングねっ！ 気に入ったわ！」
「けどそれって打ち切り決定してあと数巻で終わりなんすけどね」

「えっ」

キラキラと目を輝かせていたのが一転、ピシリと石像のように固まる。

そりゃあ、そこまで気に入った漫画が「打ち切り」って言われてしまえばそうなるかもしれない。ただ最近……と言うかもう5年位前からすんげーつままない。

いや、かろうじて代行証消失編までは許せるけど最終章が明らかにつままないのにダラダラ続いていて、それでもまあ購読してたけどつい最近買った最新刊に入ってた広告に最終巻の発表があつて、驚きよりも当然かと納得の方が大きかったんだが。

「ええっ!? これってどうとう打ち切りになったの!？」

「ああ。最新刊に入ってた広告に書いてた」

打ち切りの事実にはねーちゃんも驚いていた。少年漫画だけど俺が読んでいた影響で帰ってきた時には読んでいたし。ただ評価については俺と同じくここ数年のは面白くないと言っていたが、打ち切りの話は驚く事だったらしい。

……それよりある意味問題なのは鞠莉の方で、せっかく気に入った漫画が打ち切りつて宣告されればそりゃあショックも大きい。さつきまでのハイテンションは完全に消え失せ、別人みたいだ。

「そう……なんだ。打ち切りになったのね」

「あー……打ち切りになったのは確かだけど、途中までは全然面白いつすよ?」

「いえ、いいわ……サンキュー涼」

フツと憂いを帯びた顔で言って、静かに本棚に漫画を戻してしまった。……言わない方がよかったか? けど結果的に大人しくなったからいいけど……なんかこう、ちよつとだけ罪悪感が湧かないでもない。

とりあえず、BLEACHがストライクならCLAYMOREを薦めてみたらこつちも気に入っていた。気持ち最初のころよりテンション落ち込んでいたが。

「さてと、涼がいかかわしい本を仕入れていないか確認しようかな」

「ねーちゃんは大人しくぬら孫読んでろ」

※

で、翌日。

「ちよつと待てコラ」

「Oh! いきなり掴んできてなんなの? 涼」

「それはこつちの台詞だ。なに人の物を持ち去ろうとしてんだ」

嵐が過ぎ去って島に帰る2人を見送っていけと言われて見送ろうと玄関まで行った時、カバンから文字通り顔を覗かせていた黒ニャンコを発見して反射的に鞠莉を捕まえる。

いったいいつの間に持ってきていたのか。いやそれはいい、問題はその黒ニャンコをどうするつもりだったのかだ。

「欲しい」

「はいどうぞ、って言うわけないだろ」

「ええく? だつてこの黒キヤットかわいいし欲しいもん」

「自分で買え」

「じゃあ買う」

オレのを 買うな。

「もう、ダメだよ鞠莉」

「ああ……ねーちゃんからも言つてやつてくれ」

「私だつて欲しいのずつと我慢してたんだから!」

突然なに言ひ出すんだねーちゃんは。てつきり言いくるめてくれるかと思つたら謎

の主張を言い出して目を丸くしてしまおうと、はつと我に返ったねーちゃんは顔を赤くして俯いてしまう。

俺のねーちゃんは基本無頓着で、ブランド物とかにもあまり興味を示さない……千歌と曜そうだな。お前から現役女子高生なのに良いのかそれで。いや、曜は水泳用品ではブランド物を買ったりすることもあるみたいだが、それでも買うのが競泳水着とかのあたりどつかしらずれるが。

じゃなくて、ねーちゃんがねーちゃんらしからぬ発言に動揺してしまった。ひとまず落ち着けオレ。

「じ……じゃなくて、その黒ニヤンコすつごく気に入ってる子がいるから、ね？」

「む……私だつて黒キヤツト気に入ったのにい」

「い・い・か・ら・か・え・し・て・ね？」

「……Yes Mom」

有無を言わさぬねーちゃんの圧力に圧され、鞠莉はカバンから黒ニヤンコを出してねーちゃんに渡した。

ねーちゃんの言うとおり、黒ニヤンコが無くなったつてなれば千歌が発狂……とまでは行かないが暴れ狂う可能性だつて十分有り得る。あの怪獣を鎮圧するのは多大な苦勞を要するから勘弁してほしい。

鞠莉から返してもらった黒ニヤンコをねーちゃんから受け取ろうとして、ぐっと……ん？

「……………」

「ねーちゃん？」

引つ張ろうとしたらなぜかがつちり黒ニヤンコをホールドされていて、目を瞬かせてねーちゃんを見る。じーつと腕に抱く黒ニヤンコを見つめているねーちゃんは無表情なんだが、何かおかしいような気がする。

「おい、どうしたんだねーちゃん」

「あつ——ごめんごめん、なんでもないよ」

「……………ならいーけど」

もう1度呼びかけて我に返ったねーちゃんが腕の力を緩めて、ようやく俺の元に黒ニヤンコが返ってきた。

別に愛着があるというわけじゃないが、持ち主以上に気に入っている飼い主（なんかへんな言い回しだが、実際こんな感じだし）が居るから黒ニヤンコが所在不明となればさつきも言ったとおり暴れかねない。怪獣みたいなやつだからなあのパカみかん。

とにかく無事黒ニヤンコを回収し、部屋に置いてから改めて2人を見送りに外に出る。淡島までの連絡船乗り場までは少々距離があるが……と思っただら連絡船乗り

場に向かわず、むしろ逆方向に行っていることに疑問を覚えた。

「なあ、連絡船逆方向だぞ？ どこに行ってるんだよ」

「んー？ 私のバイクこっちに止めていたから」

「ねーちゃんってバイク持ってたっけ……？」

「まあね」

浦女ってバイク通学認めていたっけ？ イマイチ分からず首を傾げていると、暫く歩いてその『バイク』とご対面した……んだが。

「……なあ、ねーちゃん」

「なに？」

「なんで水上バイクがこんな所にあるんだよ」

海岸の砂浜に置いてあった1台の水上バイク。おまけにねーちゃんが制服の上からウエットスーツを着込み、思わず半眼で突っ込む。

「言っただでしょ？ 私のバイクって」

「これが？」

「うん。私もコレで通学してるから」

「果南のウォーターバイク通学ってちよつとした名物になってるのよ？」

名物って言われても、学校が違う上にここは家から反対方向だ。小さい町と言っても

気づきにくい。

「免許なら進学してすぐに2級と特殊小型免許を一緒に取ったんだよ。えっと、涼的には原付と普通免許って言った方がわかりやすいかな?」

「まあどんな感じかはイメージできつけど……なんでまた?」

「涼が原付免許取って原付通学するって聞いたから、私も学校に申請出したんだ」

聞いたから……って、そんな理由でわざわざ学校に申請出して水上バイク通学なんて世にも珍しい通学方法を手に入れたのかよ。

つか俺より免許1つ多いな。なんでだよ。

「そりゃセツトで取ったからねえ。涼も取る?」

「取れねーよ。俺がダメなの知ってるだろ」

「……まだ、ダメなんだね」

一瞬、ほんの一瞬だけ哀しげな顔を浮かべてポツリと一言。

今更昔の話の話を掘り返すつもりもないし、俺はもう気にしていないし慣れてしまったんだから気にしなくてもいいのに……でも原因であるねーちゃん的にはそう流せる話じゃねーか。

俺たち姉弟の間に漂う奇妙な空気を感じて、鞠莉は不思議そうに交互に見る。あんまり詮索とかされたくないし、ここらでお開きだろう。

「ほら、鞠莉も待たせてるんだしさっさと行けって」

「……ん、そうだね。行くよ鞠莉」

「んー……オーライ、分かったわ」

ねーちゃんに促され、鞠莉は後ろに座るとねーちゃんの腰に腕を回す。

「じゃあ涼、色々とありがとね」

「ああ。今度から着替えくらい用意しておくんだな」

「なら次からは下着は用意しておくわね」

「上も用意しろっていうかオレの服借りる前提にするな!」

それ以前に何故またオレんちに泊まる気満々なのか。いやねーちゃんちでもあるから当然だが、ノリノリってなんだ。

「次に来た時こそその黒キヤットを奪ってみせるわっ!」

「うば うな」

「ダメだよー鞠莉。あんまりそんなこと言うと急にドリフトとかするかもしれないよ?」

「うっ……果南つてばチェンジしてるう……」

さつきまで意気込んでいたのに、ねーちゃんの鶴の一言で一気に大人しくなっちゃった。なるほど、こうすれば鞠莉は大人しくなるのか。

「それじゃあ今度こそ、またね涼」

「シャイニー★」

アクセルを回し、水上バイクが波間を掻き分けて淡島に走っていく。

なるほど、直線距離なら確かにこつちの方が早い。水上バイクで通学したくなる気持ちも分からなくもない。いや、気持ちだけだからな。取らないし取るつもりもない。

「……シャイニー?」

別れ際、鞠莉の残した言葉がなぜか印象に残っていた。

「シャイニー……シャイ煮ー?」

鞠莉って黄色の目だったし、キンメダイのシャイ煮ーって……ダメだこんなの千歌と同レベルじゃねーかあんな面白くもないダジャレと同レベルのものを考えるなんて何考えてんだオレは。

そもそもオレ、魚介類全般食べねーんだよな。なら豚の角煮……コンビニ行って買ってくるか。

※

なお、その後日談。

「……………ねー涼ちゃん」

「んだよ？」

「黒ニヤンコから知らない女の人の匂いがするんだけど……ナンデ？」

「は…………？」

うちに曜と千歌が遊びに来て、いつものように千歌が黒ニヤンコを抱きかかえた瞬間、何かが変わった。

ただその原因が分からず、おまけにオレに対してではないから余計混乱している。

「くんくん……涼ちゃんでも果南ちゃんでもない。曜ちゃんはチョツパーだから絶対ないしそもそも曜ちゃんの匂いでもないし」

「犬かお前は…………」

「正直に答えて！ チカの黒ニヤンコを寝取ろうとしたのは誰なの!？」

「千歌ちゃん……それ意味分かって言ってるの？」

さすがにオレも曜も千歌の豹変っぷりにドン引きしている。

「だいたい千歌以外黒ニヤンコが好きなのヤツって……あ、いた。しかも盗んでいこうとまでしたのが1人。」

「あー……そいやあこの間鞠莉が」

「鞠莉って誰!? その人がチカの黒ニャンコを奪い取ろうとしたの!」

「お、落ち着いて千歌ちゃん! っていうかりょーくん女の子連れ込んだの!?! いつの間にも彼女なんてできたのさ!」

「誤解してるようだから説明するが彼女でもなんでもないねーちゃんのクラスメートだからな!」

勘違い爆弾を投下した曜に全力で突っ込み、その後2人にねーちゃんと鞠莉が泊まりに来た事、その鞠莉が黒ニャンコを気に入って持ち帰ろうとした事などを説明した所……曜は納得し、ご機嫌ナナメの千歌は帰るまでずっと黒ニャンコを抱きしめていた。

マルと狐面とハンバーガー

浦女に近いとある神社、その駐車場に原付を止めてオレはシート下の収納スペースから荷物を取り出して社に向かう。

「おい、いるのか？」

「そんな大声で言わなくても聞こえているぞ、涼」

と、いきなり音も無く一人の男が姿を現す。上下ともに黒と青のライダースーツを身につけ、顔の上半分を狐面で覆うというなんともアンバランスな格好をした男だ。

もちろん突然現れたのだからこいつも人間じゃなくて妖怪や幽霊の類に違わない。ずいぶんと現代的な服装である上に人間とほとんど変わらないように見えるんだが。

「ほれ、差し入れ。サンドイッチとハンバーガー」

「……いや、一応こんな面をつけている上に神社なんだから油揚げつて選択肢は無いのか？」

「お前が稲荷神でここが稲荷神社なら考えるが、流れ者な上にここは稲荷神社じゃないだろ」

「まあそうだが……いや、ありがたく貰おう」

この妖怪……って言うよりは幽霊のほうが正しいか。名前は狐の面を付けているからオレは「キツネ」と呼んでいる（まんまだな）。本当の名前はあるらしいが、「明かすつもりは無い」というからオレが勝手に付けた。

さつき話したとおり、キツネはこの神社の守り神ではない。そもそも信仰が薄れている現代で神社に守り神がどれほど残っているやら。顔を隠す理由も名前を明かさない理由もオレにはそこまで興味は無いけどな。

面で隠れていて表情は読み取れないが、反応的になんとも複雑そうなキツネは俺の差し出したビニール袋を受け取ると中を漁る。まあ……普通のあやかしはコンビニのパンとか食わないよなあ。

もっともこうして差し入れを持ってきたのはきちんとした理由があるんだが。

「さつきと食って、始めるとしようぜつと。この後も予定あつから。ノーアポだけど」

「何だ、デートでもあるのか？」

「なじみの寺で鍛錬だつつの」

「熱心だな……モグモグ」

そりゃ、鈍らせていたらいざという時に生き残れないからな。

「最近は……襲われる回数こそ減ったが、完全に無くなつたわけじゃねえんだし。内浦（こい）と沼津（ぬまづ）にはそれなりに名前も知れて、どうにか警戒させたり……仲良くなった妖怪も、

多い……けど」

差し入れのハンバーガーを頬張っているキツネに、入念な準備体操を行いながら返し、体操を終えてから両手にオープンフィンガーグローブを嵌めた。

こちらが準備を終える頃にはキツネも差し入れを食べ終えていて、几帳面にフィルムをビニール袋に入れて賽銭箱の後ろにひとまず避けてから、軽く体を解すように動かす。

オレの目的はこつちだ。少なくとも知り合いの中では貴重な『組み手』が出来るから、こつちやって差し入れ持ってきて交換条件として組み手の相手をしてもらっている。

何しろ格闘技で、おまけに使うのがCQCだ。現代軍用格闘術 使い手なんてそうそう居るわけが無い。他にも使い手というか、とりあえず人の姿に似ていて組み手が出来るなら良いという理由でカツパにも相手をしてもらっているが、何度も相手をしていたからかカツパなのにCQC使うようになってしまったこともあるが。

他の方法は……イメージトレーニングか。割合としてはこつちの方が多く、相手はいつもオレにこれを教えてくれたおっさん。実力が違いすぎて未だ黒星続きだけだな。

「……しかし食事してすぐに運動をさせるのはどうなんだ？」

「食後の運動と思えばいいだろ」

「それにしても激しいがな」

文句を言いつつも律儀に付き合ってくれるあたり、こいつも結構義理堅い。おまけにあのおつさんに並ぶ体術の使い手と来てる。

まあこっちは中国武術の使い手だが、異種格闘技みたいな扱いでいい経験になっていく。確か詠春拳……とか言う流派らしい。日本でメジャーな中国拳法といえば八極拳、八卦掌、太極拳……辺りになるか。

「今日こそは一本とってやりたい所だけだな」

「簡単に取らせるつもりは無いぞ」

ゆっくりと拳を握り、顔の両側に立てるようにして構える。オレも似たような形の構えを取るが、手を半開きにしていた。

「……………」

「……………」

ゆっくり、すり足気味に間合いを調節しつつ、相手の出方を伺う。これはオレの行動方針であって、先に攻撃を受けてから反撃に出る自己防衛を目的としている。聴取された時の言い訳もしやすいし。

すると案の定キツネの方が先に仕掛けてきた。突き出された拳を払いのけつつ突き出された腕を絡め、回り込みつつ拘束しようとするが払いのけられ、そのまま回し蹴りを繰り返す。

それを受け止めつつ、受け止めた足を掴み思い切り投げ飛ばした。投げられたキツネは器用に空中で一回転して地面に着地し、微塵も堪えた様子は無い。

本来CQCはその場にあるありあわせの物——それこそ角材や紐、ナイフとフォークにいたるまで——も活用していくのだが、今回はそういった道具類は禁止にしている。

「ふっ……しっっ！」

「っ……はあっっ！」

流れるようなキツネの連携を防ぎ、受け流し、かわし、隙を見てカウンターを狙うがどれもこれも有効な攻撃にはなっていない。キツネの攻撃が苛烈さを増していくが、それでもまだ動きは追え、反応もできる。「お前は動体視力と反射神経、そして反応速度が優れている」とはキツネの弁だ。

いつまでも防御していたら罅が明かないのは分かっているが、キツネはなかなか隙を見せない。詠春拳は動作をコンパクトにするのが特徴らしい。確かに動きをコンパクトにすれば次の動作へも素早く移ることが出来る。辛うじて隙を見出しても即座に阻まれるから厄介なんだよ。

だがこうして技術を腐らせず、なおかつそこらのチンピラを相手に技をひけらかすような物ではなく、逆に磨くことが出来るのは貴重な経験ということに変わりない。

「ちっ……！」

「(とつた!) ……せあつ!」

ラツシュの最中に一瞬だけ生じた隙を逃さずカウンターを割り込ませる。このまま決める——、つ?

「がつ!」

「甘いな」

決めたど、入ったと思つたカウンターはあつさりと防がれ、そのまま背中に強烈な肘鉄が打ち下ろされた。

ああ、クソ……今度のは通つたと思つたのにダメだつたのかよ。

「俺に届かせるには、まだまだ足りないな」

「今のは結構いい線いつたと思つたんだけどな……先はまだ長いか」

「少なくともよほど特殊な状況下でない限り、ただの人間に遅れをとる事はないだろう。低級中級のあやかしも……まあ対抗できるだろうな」

「上級なんかと鉢合わせしたら一目散に逃げるつっの……よつと」

キツネが差し出した手を掴み、引き起こされた——その反動を利用して無造作に突きを放つ。が、見透かしていたかのようにキツネは容易く突き出された拳を受け止めた。

「不意打ちも失敗だな。他にまだ手の内を隠しているなら出しても良いぞ?」

「あー……無理だ無理。完全に打ち止めだ」

不意打ちすらも通らなかつたんじや今回も負けを認めるしかねえな。これで黒星何個になったんだか……。あー、白星はいつになつたら付くんだろうなあと遥か先のことを考えながらコンビニで買ってきたスポーツドリンクを取り出す。

「そう言えば涼、お前俺の技を盗んだな？」

「ングツ、ングツ……。なんだよぶから棒に」

「さっきの組み手だ。俺の動きを盗んで覚えただろう」

キツネの指摘を受け、あーそのことかとオレは納得した。

確かにさっきの組み手の最中、オレはキツネの動き——つまりは詠春拳の動きを一部に使った。とは言ってもきちんと指導を受けていない見よう見まねの模倣だが。

「長いこと組み手の相手してもらつてんだ、師事してなくても見続ければ覚えるだろう」
「それをきちんと形になつてゐるあたり、やはりお前にはセンスがあるんだろうな。だがCCCはどうした」

「もちろんメインはCCCさ。けど世の武術家には複数の流派を修めたつてやつも大勢居るだろう？」

「まあ、そう言われるとそうだがな……。だが俺に指南してくれと言われても無理だぞ」

「あー、その辺りは気にしなくていいわ」

どうせ見て覚えるし。わけもなくそう答えるとキツネはやれやれと肩を落とした。

実際に教えてもらわなくても、数え切れないほど組み手を行ってきたんだから記憶に焼きついてい模倣は十分可能だ。実戦で使うにはまだ鍛錬が足りてないが不意打ちに使えるレベルだけだな。

「っし休憩終了。あと2、3回は付き合ってもらおうからな。次は詠春拳の比率高めてやってやる」

「熱心だな……だが良いだろう、相手になつてやる」

「そうこなくつちや。つてことでボトルを賽銭箱の裏に置き、待っていたキツネの正面に立って構える。」

詠春拳に関してはオレとキツネとじゃ天と地ほども力の差があるんだし、胸を借りる気持ちで盗めるだけ技を盗ませてもらおうか……！

※

キツネとの組み手を終え、ゴミをまたコンビニに寄つて捨てたり飲み物とかを買つて休憩を挟んでから、その足で次の目的地へ——完全な余談になるがその後3戦やって0

勝3敗に終わった。それでも得られたものは多いんだけどな。

目的地の入り口で原付を止め、ヘルメットを脱いだところ、門を潜ってきた1人の女子と目が合った。

「あ。涼さん」

「おう」

こいつはこの寺の住職の孫娘で、名前は国木田花丸。オレはマルって呼んでいて、『見える』のを知ってる数少ない人物だ。無論こいつ自身は見えるわけじゃない、普通の文学少女だが。

「今日住職は居んのか？」

「うん。またお爺ちゃんに修行を？」

「ああ。怠ったりするわけにもいかねえだろ」

この寺の住職、つまりマルの祖父には力の使い方で昔から世話になっている。そうは言っても世の中視えない人間の方が圧倒的 대부분を占めていて、マルの祖父もどちらかと言えば視えない側だ。

けど長く仏の元で修行を積み、徳を積み重ねた僧は法力という力が備わるといふ。逆にオレみたいな特異体質は『神通力』と呼ばれ、また別物だとか。住職の受け売りだけだ。

似て非なる力とは言っても力の制御に関しては共通。格闘技だって『型』があるんだし、そつちに当てはめれば分かりやすいかもな。

「……そう言えば涼さん、この間のことですけど」

「この間？ 何の話だ」

「この前、嵐があつた日ずらー！」

あー、思い出した。そう言えばあの日にマルをふざけてからかってたっけな。

「それがどうかしたか？」

「『どうかしたか？』じゃないずらー！ いきなり泊めてくれなんてどういうつもりだったんですかっ！」

「……あの時説明したとおり？」

「だ、だからつてえ……」

悪びれた様子もなく、しれっとしたまま返すとマルはげんなりしたように肩を落としてしまう。

実際迂回して帰るならマルの家がオレンちよりも位置的に近くなる。おまけに知らない間柄でもないし、ただ寝泊りする分には問題ないだろ。実行に移してねーけどさ。

「じゃあマルは嵐の中迂回して何時間もかけて帰らなきゃいけない知人がいて、自分の家よりもマルの家に避難するほうが近いから泊めてくれと頼まれても無碍に断る薄情

な奴だったんだな……」

「そうは言っていないはずらあつ！　そもそも涼さんは男の子だし、それなら学校に宿泊手続きをとるとか……」

「フツーならそうすんだらうけど、オレが夜の学校に留まれると思うか？」

「そうでした……」

オレの能力を知っているがゆえに、マルは追求することなくがつくりと肩を落とす。

「それに男女の問題だとか言ってるが、オレがマルにナニかすると思ってるのかよ？」

「それは……涼さんはそういうことはしないって思いますけど」

「なのにマルはそういう風にオレを見ていたのかー、いやーショックだ。悲しいなあ」

「……微塵にも悲しんだりショック受けてないですよね」

「まあな」

あつさり返すとマルはジト目で俺を見て、はあ、とまたため息混じりに肩を落とした。

そもそも俺がそんなことで悲しむような人間じゃねえんだし、むしろ悲しむより殴ってるほうだ。だけど別に殴ろうとするほど怒ってるわけでもないし、気にも留めねえけど。

「つかお前、これからどっか行くのか？」

「……………ずらつ」

なんとなく気になっていた疑問を問うと、マルは一瞬硬直してからだんだんと顔を青くしていく。

基本、本の虫というか文学少女と言うか、暇があれば何か本を読みふけているマルがこうして外に居るのは意外と珍しい。オレは基本的にアポ無し訪問だから、わざわざこうして出迎えに来てくれると言うこともまずない。ちよつと顔を出して少し喋るくらいだし。

……おまけに明らかに外行きを意識しているであろう服装はどう見てもちよつと散歩か買い物に行く、と言う風には見えないんだよ。伊達にヤンキー共に何度も因縁つけられて複数対1の状況で返り討ちにしたり、あやかしや霊相手にブツ飛ばして退散させてきてねえんだ、洞察力甘く見んな。

「そうでした……これから友達と出かけるんだつたずらあっ!」

「ならオレを相手にしてないでさつさと行きやいいものだろうが……遠いなら乗せてくぞ?」

「だ、大丈夫ずら! バス停で待ち合わせだから走ればまだ間に合いますずらつ! あと原付は2人乗りつてダメだったはずずら!」

チツ。知つてたのかマルめ。確かに50cc以下の原付(正確には原付1種)は2人乗りが禁止されている。仮に50cc以上の原付2種ならタンデムもOKだが、適応さ

れる免許も違う上にどっちにしろ取って1年未満じゃ禁止されてる。つまり、どっちにしろタンデムダメ、ゼツタイ。

……しかーし、マルのやつ相当テンパッてて「ずら」って言いまくってんなあ。

「あーはいはい、わーったよ。まあ転ばないように気をつけて急げよー」

「は、はいっ！ それじゃあ失礼するずらっ！」

勢い良くオレに頭を下げ、急いで走っていくマル。……けどおっそい。間に合うのかアレ……まず転ばないか見ていて危なっかしいし。

だが内心ハラハラしていたオレの気持ちとは裏腹に、マルは転ぶことなく角を曲がって姿が見えなくなる。

「……ま、オレが心配しても仕方ねーかあ」

こっちもこっちで用事済ませるとしよう、と門を通って敷地に踏み込む。

マルのじーさん、つまりこの寺の住職に会うと、なぜか淡島最中をご馳走してくれた。なんでも知り合いが差し入れてくれたとか。

そんな感じで時折面倒が舞い込むが普通の日々を過ごし、年が明けて無事に進級してから暫くし――

とある日、チカが頼みごとがきっかけにオレたちの物語が始まる——いやお前、オレを巻き込むんじゃないやねえよ普通怪獣バカみチカ。

「ちよつと！ チカにまたヘンなあだ名つけないでよ!？」

「うっさいお前今回出る予定ないのに出るなバカ」

現在のお話

普通怪獣バカみチカ（劇場版）（嘘）

『今日はまつすぐ帰ってきて！ お願ひ！』

新学期が始まって暫く経ったある日、昼ごろにチカからラインでメッセージが届いた。スタンプのおまけつきで。

なんか面倒な予感をひしひしと感じているが、これですぐに帰らなかつたらまたメンドクサイ。というかあのバカみかんの思考プロセスから考えるに勝手に上がりこんでいる可能性は十分にあり得る。なので被害の拡大を防ぐために迅速に帰宅しなきゃならねえだろう。

そんなことを考えながら特に問題なく家にたどり着き、家に入るとなぜかローファーが3組。……3組？ 部屋に行く前にリビングに居たかーちゃんに声をかけると、ねーちゃんと曜の2人まで来ているらしい。

ああ、道理で。仮にチカだけなら靴を脱いでそのままが大半で、ねーちゃんか曜のどつちかが靴を揃えたんだな。けど3人揃ってくる……つつーのは珍しいシチュエーションだ。学校がまだ同じで、ねーちゃんもこつちに居た頃はかなりの頻度で3人揃っ

ていたはずだが、進学してからはめつきり減ったはず。浦女ではどうなのかしらねーけど。

「あ、涼ちゃん帰ってきた！ おかえりー！」

「……………」

自室に入ると、人様（オレ）のベッドに堂々と寝転がって黒ニャンコを抱えていたチカを捕捉。問答無用の無言でカバンを投げつける。

「ぶふえっ！」

「色々とツツコミてーことがあんだが、異論はねえよな？」

「あー……………もしかして、りよーくんお怒り気味？」

「そりゃあ、すぐに帰宅するように言われ、断り無く部屋に入り込まれ、あまつさえ我が物顔でベッドを占領されていて心中穏やかでいられるとでも？」

「どうどう、ちよつと落ち着こうか涼」

極めて冷静に、そして淡々とした口調で顔が若干引きつっている曜に説明すると、冷や汗を掻いてねーちゃんが宥めようとする。

何言ってるんだろうなねーちゃんは。落ち着いているのに。落ち着いて客観的に状況を把握し、その上で我が物顔でいるバカを叩きのめしただけなのに。

そう説明すると、曜もねーちゃんも苦笑い。そんな顔をする理由を追求せず、ひつく

り返ったチカの顔に張り付いたカバンを引き剥がし、襟首を掴んで強引に起こす。まるでネコみたいだな……。

「んで？ わざわざ人を呼びつけておいて用件はなんだ？」

「…涼ちゃんひどい」

「もつとひどいことやって意識ブツ飛ばしてやろうか、ああ？」

「けっこーです！」

低く耳元で囁くと、チカは顔を真つ青にしながらベッドから飛び降りてそのまま正座。きちんと黒ニヤンコも抱えて。

はあ、とため息をつき、ジャケツトを脱いでベッドに投げると、そのままベッドに腰掛けた。

「で、改めて聞くがなんなんだ？ まさか遊ぼうって理由だけじゃねえんだろ。もしそうなら最初のラインでそう書いてあるはずだ」

「やつぱ鋭いね涼は。まあ詳しい説明は千歌から聞いてほしいんだけど……」

ねーちゃんに言われ、ジロリとチカを一瞥。睨まれたと思ったのかビクツと怯えたように震えるのを曜に慰められて、チカは決意を固めて口を開いた。

「あのねっ、スクールアイドルはじめたの！」

「スクールアイドル……」

ズイツと顔を寄せてきた分を顔を引き、じつとチカを見つめる。

「——つてなんだそれ？」

まったく聞き覚えの無い単語に聞き返すと、チカは諸手を挙げてひっくり返りそうになった。そんなに驚くことかよ……？

「ええええええええつ?! 涼ちゃんスクールアイドル知らないの?! ウソでしょー!?!」

「少なくともお前の一般常識とオレの一般常識が寸分違わず同一とは思うな」

「あつはは……まあそうだよねえ。私も知らなかつたんだし涼が知ってるはずないか」
「と言うか、りょーくんってアイドルに興味なさそうだもんねえ」

まあ、スクールアイドルがどういうものかは知らないと言うのは確かだが、アイドルって言うからにはあのテレビに出てるようなアイドルとかなんだらうってのは分かるけどよ。

「スクールアイドルって言うのは学校でアイドル活動している人たちのことだ——」

熱心にチカが説明しているが、さして俺は興味も関心も惹かれないので程々に聞き流していたが、要約するところらしい。

『学校生活を送りながらアイドル活動をするアマチュア集団。全国各地にスクールアイドルのグループが存在し、同年代を中心に人気を博している一大カテゴリー。スクールアイドルグッズを専門に扱うショップもあり、中にはプロのアイドルになる人もいる』

「だそうだ。うん、聞いても「へえー」としか感想が出てこない。

「そんで？ そのスクールアイドルつてのはじめて何するんだよ。淡島でも開拓して農作物育てるのか？」

「いやその認識は間違ってるって私でも分かるよ。アレって明らかにアイドルのすることじゃないでしょ」

「はいっ！ 農家よりも船乗り系アイドルがいいと思いますー！」

「ああもう反応しないで囉ー！」

「っーか食いつくところはそこなのか囉は……っつて言うツツコミは置いておき、何で突然そんなのはじめようと思いつたんだチカは。」

「きっかけはね……」

「そう言いながらタブレットを取り出してぱっぱと操作し、目当てのものを表示すると画面をオレに見せる。」

「なになに……第2回Love Live! 優勝——え……ゆず……か？ なんて読むんだこれ。ロシア語？」

「ミューズだよ！ μ's！」

「……石鱈？」

「あ、やっぱり涼もそっち先に連想してる」

そりやあなあ。ウチのハンドソープってそれだし。

「もお〜！ まじめに聞いてよ〜！」

「はいはい、わーっただよ」

どんだん話かざれていくのに痺れを切らしたチカが頬を膨らませて吼えた。

で、チカの説明を掻い摘んで聞くと、このμ sというグループは東京の秋葉原に存在したグループだそう。

過去形なのはもう何年も前に解散したからで、このグループは結成して1年足らずという超ハイスピードでこのラブライブ！ の第2回大会を優勝して解散したらしい。まさに彗星のように現れて消えたと言ったところか。

このグループは元々母校の廃校危機を救おうと結成されたもので、事実活動の甲斐あってそれまで入学希望者が右肩下がりだったのが一気に跳ね上がって毎年入学希望者が絶えない状況になったらしい。

なるほどだいたいわかった。

「要するにこのμ sってのに影響されてスクールアイドルになって学校を救おう

……ってことか？」

「うん！ さすが涼ちゃん分かってくれた！」

「ああ。お前が相変わらず残念なおツムしてるっていうのはな」

「……ほえ？」

きらきらと目を輝かせていたのが一転、オレの言葉の意味が分からず目を点にするチカ。

チカたちの通う浦の星女学院の状況は俺も聞き及んでいる。生徒数が激減してμsの属していた学校と似たような状況に陥っていることも知っている。

……が、このμsの学校と違う最大のポイントは、浦の星女学院の統廃合が確定している。という事だ。

つまり廃校は確定されて覆えることはない。どうがんばってアピールしても、だ。

「それは……まあ、チカが考えても仕方がないし」

「どうせお前のことだからノリと勢いだけで決めたんだろ」

「ぎくっ」

「けどそれだけじゃどうにかなる問題ばっかじゃねえだろ。アイドルやるってことは人前に出て歌ったり踊ったりするんだろ？」

「そ……それはもちろん！」

「その曲は？ 作詞に作曲、あとダンスはどうするんだ？」

「ぎくぎくっ」

「仮にそれがクリアできたとしてもライブをするならステージも必要になる。会場の確

保は？ その設営は？」

「ぎくぎくぎくぐ」

淡々と、チカが見過ごしてきた問題をピックアップして掲示する度、言葉の槍がチカの胸に突き刺さっていく。他の2人もそれらの解決策を提案できずに目を逸らしていた。

とどのつまり、この内浦でスクールアイドルつてのをやるというのが大前提でありながら最大の問題になってる。こんな所までわざわざ見に来てくれる人間がいるかも怪しい上に、イベントが出来ても精々が漁協で、来るのはじーさんばーさんくらい。これが沼津ならハードルが少し下がるだろうが……ウチの学校にスクールアイドルなんてあったか？ 多分ねーか。

「……りよーくんは千歌ちゃんかスクールアイドルをやるの反対なの？」

「否定も肯定もしねーよ。ぶっちゃけて言えば他校のオレに関わりないことだ。だがこの問題をどうにかできないのに活動なんて出来るのか？」

「まあその通りんだけどさ……その割りにずいぶんトゲのある言い方じゃない？」

「そりゃねーちゃんたちがチカを甘やかしてるから、オレが現実を見させてやってんだろ」

けどそれはいい。こういう役回りなんて気にならねーし。

「……つか面子は？ まさかチカだけってやつか？」

「えつとー……曜と私も誘われて、一緒にやろうってことになって」

「……それマジ？」

「うん。マジ」

俄かに信じがたい言葉がねーちゃんの口から飛び出して、思わず目を瞬かせる。

開いた口が塞がらない……ってこういう事なんだな。アイドルとは縁が無さそうな2人がアイドルになるって、誰が予想できんだ。

「曜ってお前、確か水泳部に入ってたろ？ 辞めたのかまさか」

「辞めてないよ。水泳部とスクールアイドルの掛け持ち！」

「お前が体力の上限不明の体力バカってのは知ってっけど、やれるのかよ？」

「さりげなく私バカにしてるよね！ ま、まあそれはともかくやれるよ。やれるし、千歌ちゃんと一緒にやりたい！ ちっちゃい頃から一緒に夢中になれることをしたいって、ずっと思ってたから！」

あー、二兎を追うものは一兎をも得ずって言葉があつてだな……けど意思是固いらしい。

「……ねーちゃんは？」

「最初は私もそんなに興味が無かったんだけどね……まあ、どうにかなるかなって」

「……………はあ」

樂觀的なねーちゃんの考えに深くため息。昔からねーちゃんはチカに甘い。砂糖よりも甘い。血を分けた弟を差し置いて姉妹みたいに仲がいい。いや嫉妬とかしてねーから。

「……………」

徹底的に問題を突きつけてやった結果、チカは俯いて黙り込んでいた。おい、その2人。「千歌(ちゃん)を泣かせた……………」みたいに半眼で見るんじゃねえよ。オレは何も間違ったこと言ってるねーだろ。

「……………う」

「あ?」

「うっ——がぁー!」

本当にいきなりだった。顔を上げたチカが何の脈絡もなく吼え、その場にいたオレたち3人はぎよつと目を丸くする。

そのままますますにオレへ飛び掛り…………腕を掴んで捻り、腹と頸椎に軽く1発叩いてベッドの上にねじ伏せたが。

「ぐへっ!」

「いきなりなんなんだよテメーは…………怪獣か? ついにケモノを通り越して怪獣にレベ

ルアップしたのか？ オツムが残念なまま普通怪獣バカみチカになったのか？」

「うぐぐ…っ！ だつて涼ちゃん、さつきからヘリクツばつかじやん！ 先の事なんて今考えたつてなんにもわかんないよつ、チカはやりたいつて心の底から、本気でそう思ったの！ あの s みたいに輝きたいつて！ だからやるつ！ ぜつたい、ぜつたいにやるの！」

ねじ伏せられながらも、顔だけはオレに向けて力説するチカ。

その熱意だけは認めてやりたい…が、それだけじゃどうにも出来ないからオレはあ
あ言つたんだ。

「ほら、涼。そのくらいにしてあげたら？ 心配してくれてるのは分かったからさ」

「心配？ りよーくんが？」

「さつき涼が自分で言つてたでしょ？ 『オレに関わりたくないことだ』つて。それでもああやつて言つたのは私たちが途中で挫けて、やっぱりやらなければ良かったつて思つてほしくないから…違う？」

「いやいやいや、なに「涼のことなら何でも分かるんだから」みたいになつこり笑つて言つてんだよねーちゃん」

「そりゃあ実の姉だからね」

いや胸張つて断言すんなよ…どうにもねーちゃんがいると調子が狂う。

「……まあお前らが何やってようがオレには関係ねーけどさ。そんなにやりたいなら俺に言う必要ねえだろ。なんで他校のオレにわざわざ言ったんだよ」

「それは……涼ちゃんにも手伝ってほしいなあって思っ「却下無理お断りパス」即答!」
ねじ伏せていたチカを離して、捻られていた腕を摩りながら涙目で言いかけていたのを全て言う前に拒否。

「ガーンツ! とあからさまなショックを受けているチカに嘆息し、ベッドを離れイスに座った。」

「オレだって暇じゃねーんだよ。むしろ免許取るために勉強していて忙しいんだ」

「免許? また何か取るの?」

「普通自動二輪免許をな。通学には使えねーけど所持の禁止はされてないし」

「でもなんでもう一つ免許とろうって思ったの?」

「……………」

「ごもつともな疑問を問われ、つい口を閉ざした。」

元々取りたいと漠然とは思っていたが、きつかけは去年、ねーちゃんが水上バイクと船舶版の普通免許を取ったとカミングアウトしたこと。

それがなんつーか、悔しいというかなんと言うか……いくらセットで取れるんだと説明されてもやはりちよつとした対抗心みたいなのが芽生えて、「とりあえず免許だけで

も」と親を説得してなんとか普通自動二輪を受けることを許された。

けど曜に言ったとおり、所得は許可されているがウチの学校は原付しか通学に使えないし、取っても乗れるかどうかは現状非常に怪しいんだが。

「……別に。取っておいて損はないからな」

「ふ〜ん……」

内心を悟らせないよう、平静を装って返す。

幼馴染み2人はそれ以上追及しなかった。が、ただ1人ねーちゃんはニヤニヤと含みのある笑みを浮かべていた。

……イヤな予感をひしひしと感じる。

「ねえ、涼。私たちを手伝ってくれない?」

そう言いながらずいっと、顔を近づけるねーちゃん。けど何度言おうがオレはやることがあつから無理だと――

「――手伝ってくれるなら、おじいに口添えして新しいバイク買ってくれるよう頼んでみるけど」

「――」

ふうつと、耳元でねーちゃんの姿をしたアクマが実に魅力的なことを囁いた。甘い、砂糖菓子のように甘い甘美な響きが脳全体を支配していく。

「——具体的にオレはなにをやりやいいんだ？」

(あ。堕ちた)

(さすが果南ちゃん)

なんかチカと曜が生温かい目で見ているが、あえて気にしないでおこう。

「で、どうなんだよ？」

「あつ、えつとー……涼ちゃんって曲作りって無理、だよね」

「できるわけねーだろ。よしんば出来ても……そうだなあ、「ピストル」みたいな曲を作ってお前ら歌えるか？」

「ええええー……せめて「マリア」をチョイスしてよ」

露骨にイヤそうな顔をする曜だが、「SPELL MAGIC」をチョイスしないだけマシだと思え。真っ先に浮かんだけど。

「曲……曲かあー……そうだよねえ、曲をどうにかしなきゃだよねえ」

「曲はこっちでどうか考えてみるから、涼にはライブをやる時に宣伝してもらったり、ステージの設営を手伝ってもらったりとか力仕事で手を貸してもらってことでもいい？」

それくらいなら異論はない。むしろそれで見返りからすれば破格も破格だろ。

……ただその前に、曲の問題で立ち往生している現在その日が来るのがいつになることやら……。

※

結局その日はそのまま一向に進まずお開きになり、3人が帰ってから俺は着替えてラニンングに出ていた。

いつものように連絡船乗り場まで来て一息ついていると、視界の隅に何かを捉えてもう1度そちらを見た。

（なんだあれ？ こんな時間に女があんな場所に1人？）

背中からじゃ顔までは見えないが、髪の毛長い女が膝を抱え込みぼーっと淡島の方を見

ている感じだった。

一瞬あやかしじやないかと警戒したが、気配を探ってみる限り正真正銘生きた人間らしい。明らかに落ち込んでいるオーラが見えるが。

地元の人間には見えないし、旅行者か……？　なんかトラブってそんな自分に自己嫌悪つてところか？

まあ自己嫌悪に陥るのは勝手だが、暗くなるし女一人は危ないだろうから早めに帰ったほうがいいと思うけどな。

（まっ、オレには関係ないか。とつとと戻ろう——）

「はあ………」

背を向けて立ち去ろうとしたが、背後から重い溜め息が聞こえて足が止まる。

いやいやいや、もしかして妙な気を起こそうとしてないかオレ？　仮にここで声をかけたらずればアレだろ？　ナンパとかと勘違いされるだろ？　イヤだってそんなのキャラじゃないし。

ただここで何も見なかった振りをして、数日後テレビのニュースで「悲劇！　旅行先で強○に遭う！」みたいな事件があつて、心当たりあつたらそれはそれで気分が悪くてイヤだぞ。

「……おいアンタ」

「ひっ……」

あー、やっちゃまった……。もういいや、なるようになってしまえ。そんな諦観の思いを抱きながら女の背中に声をかける。

が、掛け方がマズかったのか女の方がビクリと震え、恐る恐るといった感じで顔を向けた。

……やっぱり地元の間じゃねーな。かといってあやかしてもやっぱりない。

「あー……いや、いきなり声をかけて驚かせたと思うけどさ、暗くなる前に帰った方がいい。女が1人で夜に出歩くのはやっぱり危険だろ」

出来る限り怯えさせないように、穏やかな口調を努めて彼女に説明する。それでも女はビクビクしたままこっちを見続けて、何か言いそうな素振りを見せない。

……もしかして外国人ってオチはねーよな？ オレ英語喋れねーよ。でも話しかけたら普通に反応したし日本人だよな。

一応忠告はしたし、これ以上関わる必要はねーかあ……？

「あー、分かった。ここに居たいなら好きだけ居てくれ。無理強いはいしねーから」
「あっ……あ、あのっ！」

素直に両手を挙げて降参の意を示し、背を向けて今度こそ立ち去ろうとしたらいきなり声をかけられて僅かに振り向いた。

「ご……ごめんなさい、いきなり声をかけられてビックリして……地元の方、ですか？」

「ああ……そうだけど。アンタここら辺じゃ見ない顔だし、旅行者か？」

「い、いえ。私、今日からここに引越してきて……」

まだ警戒心が薄れないものの、それでも彼女は事情を説明してくれた。

曰く、親の都合で東京からこつちに引越すことになり、先に引越し先に行き荷物を受け取っている親に遅れて電車に乗って来たものの、土地勘がないため迷いに迷ってここで途方に暮れていたらしい。

「携帯の地図アプリ使えば良かったんじゃないか？」

「それが……途中でバッテリーが切れてしまって」

「ここで途方に暮れていたのを、オレが見かけたよ」

「うう……ごめんなさい」

旅行者じゃなくて新しい住民だったわけかよ。親も親で途中で迎えに行くつて言う考えは無かったのか……？

「あー、引越し先の住所は分かるのか？ 何か目印になるものとか」

「そ、それなら住所を書いたメモが……あつ！ これです！」

彼女がスカートのポケットから一枚の紙切れを取り出してそれをオレに差し出し、受け取って住所を見る。

……なんだ、この住所チカんちの近所じゃねーか。これで街の方だったら難しかったけどどうにかなりそうだな。

「あの……場所分かりますか？」

「ああ。知り合いの近くだここ。案内できるけどここからだと少しかかるがいいのか？」

「は、はいっ！ ありがとうございます！」

「んじゃさつさと行こうぜ」

ペこりと頭を下げる彼女を促し、オレたちは歩き出した。

これといった話題があるわけでもなく、ずっと黙ったまま薄暗くなりつつある道を歩き続ける。そもそも初対面の相手に話すことなんてあるか？ オレは別にこのままでも問題ねーけど。

ただやつこさんは気まずそうで、しきりにチラチラと見ているようだが……。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………あ、あのっ！」

沈黙を破って彼女が声を上げた。

チラ、と背後を一瞥すると、目が合った瞬間ビクリと……怖いなら声かけなきゃいー
だろ……。

「い……………いい天気ですねっ！」

「……………は？」

「…………………」

なんか意味不明なことを言い出して思わず聞き返したが、ハツとなって恥ずかしそう
に俯いてしまう。

なんなんだこいつ……………分からない。謎過ぎる。

(あ。そう言えば……………)

「なあ、今更だけど良いのかよ？」

「……………え？」

「いや、見ず知らずの男の話を信じてのこのこついできて。何かされるとか危険性を考
慮しなかったのか？」

「…………………あつ」

別に彼女をとって食おうとか言う魂胆は毛頭無いんだが、それでも見ず知らずの男の

話をあつさり信じてついてくるってのはよっぽど肝が据わってるのか。

……などと考えていたらそんな可能性なんてミクロたりとも考えていなかったらしく、彼女はさーつと顔を青くするとがたがたと震え始めた。

「考えてなかったのかよ……」

「わ……私をどうかするつもりですか……?!?」

「いやしねーよ。そんな魂胆あつたならわざわざ訊ねたりしないだろ……ヘンなやつだなあんた」

「へ……友達からはよくのんびりしているって言われるし、自分でも自覚はありますけど……」

「自覚してるならちよつとは気をつけたほうがいいぞ。途中でオレが信用できなかったら……この道を道なりにまっすぐ行って、左手に消防署が見えたらその隣に駐在所あるから駆け込めばいい」

「……わざわざ自分で言うんですか?」

「面倒事には慣れてっからな」

皮肉つぽく笑い飛ばし、さらに歩き続ける。別に悪事を働いているわけでもねーし、身の潔白は……あ、何度も少年課の世話になってるからなあ。非はないとは言え。

「くすつ……ヘンな人ですね」

「あ？ 変人に変人呼ばわりされたくはねーんだけど」

「わ、私は変人じゃないです！」

「変人じゃなくても抜けてるのは確かだろ。人に道を聞いてさつさと住所の場所に行くとか、いくらでも方法があつたのにあんな場所で座つて黄昏てたじゃねーか」

「……貴方つて、性格悪いって言われてませんか？」

「結構な。自覚もしてる」

「はあ……ヘンな人に頼んじやつたなあ……でも人相はともかく悪い人じゃないみたいだし」

ボソツと聞こえないように小声で言つたらしいが、バツチリ聞こえてるんだよな。

別に捻りあげても構わないが、あえて皮肉にしておくか。

「独り言にしては大きい声だな」

「ひっ……!?!」

「別にとつて食おうとかいう腹積もりはねーよ。ケンカ売られたら喜んで買つて、自衛という名でグループ何個か潰してるがな」

「実はかなりの不良とか……?」

「根は善良な市民でありたいと願つてる」

まあ、叩きのめした結果、その噂がさらに噂を呼んで目をつけられてんだけどき。別

に犯罪とかやってねーからな？

……そう言えば普通に話してるな。さっきまでずっと黙り込んでたのに。

「ところで……まだかかるんですか？ 結構歩いたと思うけど……」

「あー……いま駐在所を過ぎたし、松月まで来たから200mちよつと、つてとこだな」
「結構、歩くんですね……」

「ここから沼津までに比べたらたいしたことねーだろ。ココにはなぜか男子校だけがねーからオレは毎日原付走らせて街の学校まで通ってたぞ？」

「私は絶対根を上げそうです……」

「見るからに体力なさそうだもんな、アンタって」

若干息切れを見せている彼女に、オレは肩を竦めて言っちゃった。普段から走りこんでいるからこの程度で疲れねーし、他の奴らだって……いや、身近に居る異性は除外しておこう。特に曜とねーちゃんの2人は。

それに彼女の場合は長旅や迷い歩いたつてもあるだろうし。

「つと……十千万まで来たか……住所だどこの辺りだが」

気づけばチカの家までやって来ていて、歩く速度を緩めて改めてメモの住所を見てみる。この周囲に彼女の家があるはずだが……。

「あ……多分、あそこだと……」

同じように周囲を探していた彼女が、目に留めた一軒家を指差す。

前から空き家だったはずの家だが、今は玄関に灯りがついていて人が居るようだった。

念のためその家の前まで言ってみると、表札には桜内と名前があり、間違いなく彼女の家らしい。

「ありがとうございます……本当にお世話になつて」

「別に見返り求めて世話焼いたわけじゃねーよ。見て見ぬ振りした結果事件に巻き込まれてしまったら気分悪いからやっただけ。ただの気まぐれだ。んじやな、さつさとこの土地に慣れて迷子にならないこつた」

深々と頭を下げる彼女——えつと、桜内某？ に素つ氣無く返して踵を返す。顔を上げた彼女が何か言っていたが、面倒だから走って逃げた。

これ以上関わる必要もないし、ただオレが気分悪くないからやっただけ。それ以上でもそれ以下でもない。地元の間人言つて言つてもまた会う可能性はそこまで高くねーだろ。

——なんて高を括っていたものの、暫くして本当に再会し、しかも結構な頻度で顔を合わせる事になるのをオレはまだこの時点では知らない。

極限の、戦い（墮天使編）

チカがスクールアイドルなるものを立ち上げてたと聞いてから1週間ほど。今日の放課後はゲーセンに立ち寄っていた。日々勉強じゃ息が詰まるから息抜きがてらにっ
てのが理由だ。

内浦に帰っても地元で楽しめるしい娯楽は無い。いや、ダイビングとかそういう中々体験できない物はあるし、ねーちゃんたちは遊べる場所はたくさんある、と言うだろうが現代っ子から見れば無いに等しい。

チカと言えば、作曲してくれる人材は何とか確保したという話をラインで教わったときは少し驚いたもんだ。

着々と準備を進める中、今のところオレの日常に変化は無い。そもそもあいつらが本格的に始動した時からが仕事開始みたいなモンだし、当分は自分の方に都合を割けるだろう。

つつーわけで、可能ならば1発で合格したいために気分をリフレッシュするためゲーセンへ立ち寄ったワケだ。

特に何かやりたいのがあったわけでもなく、まずはあちこち見て回って、お馴染みと

なりつつあるアーケードゲームにやってくるとイスに座った。

「機動戦士ガンダム EXTREME VS MAXI BOOST ON——通称マキブオンって呼ばれている2on2の対戦ゲームで、結構なロングセラーらしいがオレはフルブ以前のは知らん。

コインを投入し、操作する機体を……何にすつかなあ。スサノオでいいか、慣れてるし。

詳しい説明は省くが、オレが選んだ機体は格闘を主力としつつほんのちよつと射撃要素も加味した機体だ。少々クセはあるものの、オレには上手くハマるんだこれが。

えっと、EXバーストはFにしてステージは……Dルートで進むか。

つてーことで選んだルートの最初のステージを滞りなくクリアし、2つ目のステージで中盤に差し掛かった頃に唐突に誰かが割り込んできた。

あー、このゲーム乱入とかむしろアーケードの宿命だからなあ、なんて考えていると対戦相手は機体の選択を終えていよいよバトルに。

「ふっふっふ……この最強の墮天使であるヨハネに歯向かう愚か者は、我が裁きの光によつて滅ぼされる運命さだめなのよ……！」

……なんか、台の向こう側から痛々しい独り言が聞こえた気がするが気のせいだろう。

（相手は……あー、レギルスか。ちよい厄介だよなあ）

相手の選んだ機体はとにかく飛び道具が豊富で、その上最高コスト相応の性能も誇る……んだが、それも技量が伴わなければ宝の持ち腐れだ。

なんだっけなあ……確か「MSの性能の違いが、戦力の決定的な差ではないことを、教えてやる！」って台詞をどつかで聞いた覚えがあるんだけど。誰が言ったんだっけ？

だがそれを思い出す間もなく対戦が始まったことで思考は片隅に追いやられるどころかどうでもいいと一蹴してしまった。

※

結論から言って対戦相手はかなり強かった。機体特性を理解し、飛び道具の数と回転率を把握し駆使した戦術はスペック頼りではなく確かなプレイヤースキルを伴い機体性能を十全に引き出している。

技術的には互角、機体性能で言えばコストが上がった分レギルスが有利……だが結果だけを言えばオレが勝った。

最高コストの3000帯は性能が高い分、落とされた時のリスクも大きい。対する2500帯のスサノオは落とされても若干余裕がある。

とはいえ最大の理由はこっちの反応速度に尽きた。おかげで僚機と自機を合わせて2落ちで勝てたし。

……つか、こっちが向こうの反応を上回る度に「なんでっ!?」とか、「まさかニュータイプ……いえXラウンダーなの!?!」とか、「ちよ、つとま……ひいーん!」ってリアクションが聞こえたんだが……気にしたら負けか。いちいちそんなリアクションしてたら勝てる勝負も勝てないんじゃないの?

ああいう落とされた時のリスクが怖いから3000コスってあまり使いたくないんだよなあ……なんて思いつつ、そのままブランチャバトルに戻ると順調にクリアして全ステージをクリアすると、連投なんてマナーの悪いことはせず席を空ける。

さーて、次は何やるかねえ……と辺りをうろついていると、クレーンゲームが並んでいるコーナーでふと足を止めた。

いくつか並んでいるクレーンゲーム。その中に1つ、見覚えのあるキャラクターのぬいぐるみが積まれていて、それを熱心に取りろうとしている少女。

「今こそ墮天使ヨハネの真の力を……っ！ てえーいっ！」

なんか変な独白を吐きつつ少女はボタンをポチポチ押してクレーンを動かし、饅頭み

たいな形をしたブタのようなネコ——って言うかまんまニャンコ先生を取ろうとした。

ダークブルーの髪に頭の右側に団子を結った整った顔立ちの少女。見覚えこそ無いが着ている制服が浦女のもので、リボンの色から1年生と言うことは判別できる。

……で、件のニャンコ先生は下半身をアームで掴まれ、ポケットまで運ばれていき——アームが開いてポケットに落下していくが、なんと途中で弾かれてポケットに入ることなく積まれた他のぬいぐるみたちの所に戻された。

「あああ——っ！　なんでよ、入ったでしょ？　今の完全に入ったでしょ!?　もう1000円以上入れているのになんで取れないのよ——！」

（うわあ、運わる……）

よほどニャンコ先生にご執心だったのか、ガラスに張り付きながら悲痛に叫ぶ少女に心の中で呟く。

ほしいと言う気持ちも分からなくもない。けど「偉い人が言ってた。UFOキャッチャーは貯金箱」って誰かが言ってた。ものの見事に貯金してるなあいつ……。

まだぬいぐるみを諦めていないと言うか、意地でも取ろうと躍起になつていた彼女は財布からコインを出そうとする……が、チツと露骨に舌打ちして足元のカバンを掴むと足早にその場を立ち去った。諦めたわけじゃなくて小銭が尽きたから両替しに行つたらしい。

その場にはオレー1人になり、ニャンコ先生が積まれているクレーンゲームに目をやる。確か去年、鞠莉が来た時欲しいとか言つてオレーの黒ニャンコを強奪していこうとした事があつたよなあ……。

(まあ一回で獲れるほど甘くないだろ)

誰に言い訳するでもなく、財布からコインを出してクレーンゲームに投入。起動音とポップなBGMが鳴り響き、あちこちから内部を観察して取れそうなターゲットに狙いを定めると、ボタンを押しした。

狙いは先ほどの少女が獲ろうとして弾き出されたニャンコ先生。位置的にこれもつとも獲りやすいと結論付け、ボタンを押ししてクレーンの位置を操作し、狙いを定めるとボタンを離す。

アームが下へと伸びて開いていき、丸い胴をしつかりと挟んで持ち上げた。

問題はアームのパワーだが、パワーは足りているらしい。……すると何の抵抗もなく、クレーンはポケットまで移動するとアームを開き、ぬいぐるみは何かに阻まれること無くポケットを通つて——ボスンと。

「……………」

おいおい、マジかよ。1発で獲れたんだけど……なんか拍子抜け。位置取りとかが良かったって理由もあるんだろうけどさ。

まあ獲れたものは獲れたんだし万々歳か。なんか適当な理由を並べて納得して、取り出し口からニャンコ先生のぬいぐるみを取り出すと——じーつと、視線を感じた。

見るといつの間に戻ってきてたのだろうか、浦女の制服を着た例の女子がオレ（と抱えているニャンコ先生のぬいぐるみ）を虚ろな目で凝視していた。なんか目がこえーぞお前。

「……次、どーぞ」

「——待ちなさい天界の使徒」

そそくさとその場を後にしようと思早に立ち去ろうとしたが、すかさず肩を掴まれた。

「何か用でも?」

「1度ならず2度までも……しかも今度は我が下僕（予定）を横から掠め取るとは……貴方、一体どういうつもり? それほどまでにヨハネの率いる悪魔の軍勢が強く大きくなるのが恐ろしいのかしら?」

下僕ってなんだ。そもそも天界の使徒ってもしかしてオレを指してるのか?

言っている意味はさっぱり理解不能だが、翻訳するとどうやらこの少女はオレが獲ったニャンコ先生に対して文句があるらしい。

「掠め取るも何も、台が空いていてきちんと金を入れて正式な手順を取って手に入れた

んだが」

「空いていなかったわ……！ 私が力を取り戻しに行った僅かな隙を突いて横取りしたのでしよう……」

「すみません日本語しか分からないんで日本語で話してくれる？」

「日本語よっ！」

なんだこのメンドクサイ奴……これって中二病って言う残念な奴じゃなかったっけ？　なんかオレのクラスにもそんなキャラの奴がいて、へんな部活だか同好会があったような……確か『極東魔術昼寝結社の夏』……とか言う何か良く分からないのが。良く分からないのといえれば鳳凰院凶真とか自称している人が作った『未来ガジェット研究所』……とか言う妙な同好会も有名だったな。

……あれ。振り返ってみるとウチの学校へんな部活とか同好会多くね？

「と、とにかくこれはヨハネが見定めたリトルデーモンで、我が下僕に加えるはずだったの！　けど中々墮天しなくて、力を高めるためにちよつと離れていただけなのよっ！」
「いや筐体の中にある時点で誰のものでもないし、強いて言えば店側が一時的に所有権を持つてるだけだろ」

熱く捲くし立てる彼女の意見を一蹴すると、ぐぬぬ……なんて唸っていた。

にしてもこの声、ごく最近聞いたような……いや気のせいか。

「じゃ、オレはこれで」

「待ちなさいよう！　こうなったら……これで、どうっ!?」

強引に立ち去ろうとしたオレを、少女は何とか食いついて離れず、財布から1000円硬貨を取り出すとオレへと突き出す。……何のつもりだこれ？

「取引よ……貴方が払った対価と同じ分の対価を払うわ。これなら貴方も文句は無いでしょう。むしろヨハネの方が損してるじゃない？」

「お断りだバーカ」

「なんでよっ!?　お金払うって言ってるじゃない！」

仮にその取引に応じたとして、もう一度1発で取れる保障なんて無いだろうが。

そもそもそこまで執着しているのにそんな狡いで手に入れて嬉しいのか。

「ぐっ……でも何が何でも欲しいのよ！　こっちはもう10000円以上つき込んでるのに獲れないどころか弾かれるほど嫌われているし！　かと思えばなんにも苦労せず1発で取った人間が目の前にいるし、しかもヨハネが狙っていたぬいぐるみだし！」

「あー……ドンマイ？」

メンドクサイ手合いだなあコイツ……熱意だけは伝わったけど、それをオレにぶつけられた所であ。

「うっ……ぐぐ……ぬうう……！」

そんな唸ってケモノか己は。怪獣は1匹で十分だぞ。

のらりくらりと、あるいは論破されてぐうの音も出てこなくなった少女は硬貨を握り締めたままブルブルと震え、

「これで勝つたと思うなよ〜〜！」

まるでどこかの負け犬のような捨て台詞を吐き捨て、こつちを指差しながら逃げ出していった。

……勝つたとか負けたとか、それ以前に勝負だったのかよコレ？

首を傾げるがぬいぐるみはゲットできたんだからいいかと納得すると、カバンの中に押し込んでゲームセンターを後にして家路に着いた。

ちなみにこの話、続くからな。

番外編 やっぱりガチャなんて悪い文明なのよ!そんなの破壊してやるわ!

既読 《呼符で武蔵来た》

《爆ぜろこの幸運ランクA+!》

新年早々なにしょーもないやりとりやってんだオレたち……。

ソロンモ……じゃない、ゲーティアを打倒し、人理定礎を復元して新年を迎えることができた年明け。カルデアが新たなサーヴァントを召喚できる可能性を持ってきた。(と言う設定な)

存在自体は体験クエストが実装されていたから気にしなかったが、まさか溜まっていた呼符(およそ20数個)の消化を目的に回していたら来たよ、宮本武蔵。相変わらず女になっていたけどいつものことですねわかります。

その事を善子に画像もオマケでラインに送ったら、上記の反応。悔しがっている顔が目に見えなな。

『♪』

「つて噂をすれば善子が釣れたな……もしもし」

《あけおめ福袋ガチャやって！》

「新年の挨拶と混ぜるな。つつーかガチャってアレか？ あのクラス別のやつ」

《そうよ！ 私のガチャをやってよ！》

「なんでひと様のガチャを課金してまでやらなきゃならん」

《そうじゃなくてえー！ 私が課金するから引くのはアンタがやって、って言うてるの！》

はあ？ ならそのまま自分で引けばいいじゃないか。何でわざわざオレにやらせようとするんだよ。

《アンタのその強運が頼りなのよ！ 今まで星5サーヴァント確定の福袋をやったけど狙ったサーヴァントが出なかったの！ こうなったら涼……アンタのその強運で呼び込むしかないのよ！ いい加減に目当てのサーヴァントを私のカルデアに迎えたいのよおく!!!》

仕舞いには涙声になってるし善子の奴……なりふり構ってられないのかお前。

《ふんっ……貴方には分からないでしょうね。持たざる者の悔しさが！ 水着サーヴァントは全て網羅して、期間限定サーヴァントもほぼ網羅！ 邪ンヌまでいるし極めつけに最新の武蔵まで迎えたとかもう爆ぜなさいよこのバカ！》

「ただの妬みじゃねーか。多いなら多いで育成と素材調達が厳しいんだぞこっちは」

《私から見れば嬉しい悲鳴にしか聞こえないわっ! いい、今からそっちに行くから!

バス停で合流!》

一方的に告げて、ブツツと電話を切ってしまう善子にオレははあく……と面倒に思いながら溜息をつく。

せめて元旦くらいはあいつらに振り回されずに静かに過ごしたいんだが、そうは問屋が卸さないらしい。

「……はて。そういや何か忘れているような」

初詣……じゃ、ない。なーんかを誰かに言われていた気がするんだが……思い出せないならたいした内容じゃないだろうな。

どんなに急いだとしても——って言っても移動手段はバスだから急げないだろうけど——30分以上はかかるだろうし、のんびりコーヒー飲んで出かける支度するか。

※

「出たわね我が永遠のライバルツ! 持つ者と持たざる者の象徴! うっかりそのiP

honeysを落としてアカウントを焼却しなさいよそれがガチャ運だけでも私に寄りなさいよおっ！」

「新年早々欲望ダダ漏れだなおい」

乗ってきたバスから降りてきて早々、ピンツと指を突きつけてきた善子に呆れながら頭に手刀を打って突っ込み、ブレない善子に溜息をついた。

……何が悲しくて他人のガチャをわざわざ引かなきやなんねーんだ。いや、むしろただガチャを引かせるためにバスに乗ってやって来るこの行動力は何だ。

「決まっているわ——それは執念よっ！ 望んだ星5サーヴァントを手に入れるためなら手段は選ばないわっ！」

「呆れるのを通り越してもう感心する。見習おうとは思わねーけどな」

「フンツ。好きだけ言いなさい……持つ者には所詮分かるはずも無いわ」

さいで。けどそれに巻き込まれるオレに対しては何も無いのかよ。

「うっ………つ、付き合ってくれて、あ………ありがとう」

「よろしい。んじや、さっさと片付けんぞ」

「あつ、カード買ってないからコンビニで買ってから——」

「——あーっ！ 涼ちゃんと善子ちゃんだ——」

その時、善子の台詞に被せて能天気な明るい声が背後から響く。

振り返るとバカみかんに梨子、それとねーちゃんの3人がこっちに向かつて歩いていった。

「なんだお前ら。こんなトコでなにしてんだよ」

「それはこっちの台詞だよ。2人なんて珍しい……ってわけでもないけど、どうしたの？」

「コイツが代わりにガチャ引いてくれ、って頼んできた」

「ガチャ……ってよつちやんたちがクリスマスにもやっていたあのゲーム？」

「ええ……癪だけど、この男の幸運ランクは認めざるを得ないわ。対する私は幸運ランクE……狙ったものはほぼ引き当てられない。だからこの、無駄に高い幸運で武蔵を呼符単発で引き当てた憎つたらしい男に引いてもらうのよ! 私が真に望んだ英霊をツ!!!!」

「そ……そっか、大変だね……(2人とも色んな意味で)」

おい善子、オレを貶すのは後でやり返すのは良いとして、熱入りすぎて梨子が引いてるのに気づいてないのか。

「へえー。——そうだ、そんな事より2人ともあけおめー!」

「そんな事ってなによう!」

「おー、おめつとさん。それでねーちゃんたちは何やってたんだよ」

「私たちは初詣だよ。その帰りに2人を見かけたんだ」

あー、そういうや初詣ってまだやってなかったな……別に願掛けとか特に無いし、そもそも住み着いてない社でお参りしたってなあ。

「チカはてつきり、2人がデートするのかって思ってたんだけどなー」

「あつはつは。いいかバカみかん、そんなの絶対ありえねーから」

「そ、そうよ。なんで墮天使である私がこんなのと!」

「やっぱこのまま帰って寝るかなー」

「ごめんなさい私が悪かったです!」

(よっちゃん完全に涼くんに手綱握られちゃってる……)

この状況でどっちの方が上かと言うのは即座に理解したらしいな。いや、普段から俺の方が立場上だけど。年上で先輩だし。

「で、えーつと……なんだっけ? 先にコンビニでカードを買うんだっただか?」

「う、うん……」

「じゃあ私たちもあつたかい飲み物買いにコンビニ二行こうか」

「なんでねーちゃんたちまでついてくんだよ……」

「別に私たちは飲み物買うだけだよ? それとも家に行つて飲み物用意してもいいの?」

ん……まーそーだけだよ。それに俺んちはねーちゃんちでもあるわけだけどさ。別に面白いことなんて起きないと思うがなあ。

結局ねーちゃんたちとコンビニに寄って、善子がiTunesカードを買ってコードを入力して、きちんと課金出来たことを確認すると俺にバトンタッチされてFGOを起動する。

周りが買い物をしている最中、手持ち無沙汰で気まぐれにTwitterを開いてみたらGoogle Playでは課金ができない不具合が発生して地獄絵図の様相を呈していた……iPhone使っていて良かったな善子。

「——ところでどのクラスを引くか聞いていなかったんだが、どれ引けばいいんだ?」
「正直、悩んでいるわ。ダントツなのはオルタニキやヴラドおじさまだけど、それを狙って夏の福袋やったらナイチンゲール出て挫折したし……やっぱりここは原点回帰してモードレッドとアルトリアオルタかしら。だけど術枠は外れが無いし実用性高いし……それとも2分の1の確率でジャック? ねえ涼、ちよつと因果律操って特定のサーヴァントだけ引き当てることってできないの?」

「んなの出来るわけねーだろ。お前は俺を何だと思ってるんだ」

「幸運A+でレア鯖ぽんぽん生み出す製造機」

「OK、それは俺に対してケンカ上等かかって来いって意味に捉えて良いんだな?」

「こらこらー、新年早々女の子苛めちゃダメだよ涼。それにあながち間違つてないんでしょ」

こ、の……ねーちゃんまでそんなことを言うか。

「ねえねえ梨子ちゃん。善子ちゃんの話、全然分らないんだけど……どういう意味？」
「やつてる人にしか分からない話だからね……」

「そっかー。チカには外国語にしか聞こえないな」

いや、多分それはどのジャンルにおいてもそうだろう。なじみの無い話を熱弁されても相手にはまったく理解できているとは思えねーし。

辛うじてチカにも理解できる内容だったら……やっぱエクバ辺りになるんだろーな。

「……で、結局どのクラスを引くんか？」

「むむむ……ここはやつぱり叛逆の騎士モードレッド狙い！」

「要するに剣か。本当にそれでいいんだな？」

「武士に二言は無いわっ！」

お前武士じゃねーだろ。墮天使どこ行った。と言うツツコミは心の中に留め、召喚の画面を開くと剣——いわゆるセイバークラスの福袋召喚を選びタップする。

最終確認が表示されて善子に目配せすると、こくりと頷いたのでタップした。

「鯖だな」

「え。なんで分かるの?」

「3つの輪っかが囲んでるだろ、それだとサーヴァントなんだよ……カエサルだな」
「プリズム還元ね」

・2回目

「また鯖か」

「モーさんモーさんモーさんモーさん……!」

「残念剣ジル」

「なんでよおおお!!」

「よ……よっちゃん、まだ8回あるから、焦らないで!」

・3回目

「お。今度は礼装だな」

「どうやって見分けるの?」

「輪が1つなら礼装、3つならサーヴァントで見分けられるんだよ。……おお、カレスコ
じゃないか」

「ちが……嬉しいんだけど、違う……!」

・4回目

「また礼装だな」

「モーさん……モーさん来て……」

「礼装って言うんだからサーヴァント？　じゃないでしょ……あ、短剣みたいなのだね」

「ヒュドラ・ダガー……時にニトクリスとかは？」

「持っていないわよう……」

・ 5 回目

「鯖だな」

「モーさん！　今度こそ！　いい加減にい……！」

「お、金演出……」

「!?　モーさん!?　来るのモーさん！」

「……アルテラ」

「はか、破壊の化身ンツ!?　なんで!?　持つてないけどなんで!?　嬉しいけど違う、あ

なたじゃないのよ！」

「よっちゃんがついに壊れた!?!」

・ 6 回目

「これは……礼装みたいだな」

「くふつ……落ち着きなさいヨハネ、まだ3回ある……あと3回にモーさんが入る可能

性は十分にあるわっ!」

「あ。ライオンのぬいぐるみだね」

「まあプリズム還元だな」

・ 7回目

「また礼装か」

「礼装もういいから! サーヴァント! サーヴァント出して! モードレッド来て!」

「ねえ、礼装演出からサーヴァントの演出に変わることってあるの?」

「ない。おつ、聖者の依代じゃないか。良い奴出たぞ」

「違う……効果は嬉しいけど聖者じゃないのよ……」

・ 8回目

「あ、礼装だね」

「礼装なんてどうでもいいのよ〜!」

「鋼の鍛錬」

「愉悦! マーボー! 神父!」

「よっちゃんかなにを言ってるのか全然分からない……」

・ 9回目

「サーヴァントみたいだな」

「モーさん！ モーさん来るの!？」

「残念フェルグス」

「」

「よつちゃんがショックのあまり石に!？」

・ 10 回目

「お……おい、鯖だぞ。しかも金演出」

「っ！ モードレッド!？ いえこの際アルトリアオルタでもいいわ！ どっちでも良い

から来て——」

／すまない……俺だ／

「ジーク フリート……かふっ」

「よつちゃんがくず折れたー!?!？」

※

安定のすまないさんオチだったってわけか……いや、トータルで見ると悪くないんじゃないか? サーヴァントにはアルテラにジーク、礼装は依代と鋼の鍛錬に極め付けにはカレスコがあるじゃないか。

そこまで落ち込むことは無いと思うが……確かに目当てのサーヴァントは出なかったが。

「なんで……なんで来ないのよおっ! 私じゃ絶対でないから涼に頼ったのに! いや確かに普段の私よりも明らかに引きがいいけども! 求めていたのは反逆の騎士と闇堕ち騎士王なのがいいいい!」

「喚くなよ……そもそもセイバークラスは3人いるんだから確率は高くないだろ」

「だとしても涼の幸運なら引き当てられると思っただの〜!」

「いやあ……この場合善子の邪念が邪魔したんじゃないかな」

「あー……すっごい念を送ってたもんね」

それじゃあいくら俺に頼っても当たらないだろ……しかも途中でアルトリアオルタまで追加したら余計出ないし。

「涼くんは普段どうやって引いてるの?」

「あ? 別に……ただ引けたらいい〜って程度にしか考えてね〜な」

そもそもこのゲームって基本渋いんだからピンポイントで狙って当たる確率なんてタカが知れてるし。なら最初から期待しないで来れば儲け物って考えるべきだろ。

「……じゃあ涼、あなたも引いてみて」

「はあ？　なんでオレまで……」

「い・い・か・ら！　ヨハネだけなんて不公平じゃない！」

「いいんじゃないの？　それにお金だつてあるんでしょ？」

そりゃああるけどさ……と善子の側についたねーちゃんに渋りながらも同意する。

んー……まあ、運営へのお布施って考えりや良いのか……と仕方なくコンビニでiT

unesカードを買って戻り、コードを入力してそのままFGOを起動。

「涼ちゃんはどのクラス……？　っていうの？　を選ぶの？」

「あー……まず外れが無いキヤスタージャやねーの？　ここは」

「安牌を選ぶ、と言うわけね……ずいぶんと消極的じゃない」

「孔明、人権タマモ、良妻三蔵のどれかが手に入るのに消極的か？」

「いいえ。どれ引いても大当たりよ」

「よっちゃん……」

呆れている梨子は置いておいて、んじゃあオレの10連つと……。

「あ。サーヴァントだね」

「演出に変化は無し……3確定ね」

「え。何コレ? イラストがバチバチって輝いて……」

「嘘! 昇格演出!?! 初手からってうああああ孔明いい人権いきなりいいいつ!」

「よっちゃんが一発で壊れた!?!」

・2回目

「今度は礼装の演出みたいだね。あ、なんかメガネ掛けた白衣の人が描いてあるよ」

「2030年の欠片……ぐふうっ!」

「よっちゃん! 気を確かに! まだ2回目だよ!?!」

・3回目

「また礼装だー。……ってこれマーボー豆腐だよね? こんなのもあるの?」

「あーまあな。ただ効果は存外悪くないんだが。けど還元だな」

「今の私にはその泰山の激辛マーボーよりも辛くてつらい仕打ちを受けているわ……」

「で……でもほら、さすがに神引きってそうそう起きるものじゃないし……」

「いやいや、涼ならもつとえげつなく行くよ」

「いやな信頼の仕方んだけどねーちゃん……」

・4回目

「また礼装だな……お、フォーマルクラフト」

「ごはあつ！」

「何それ強いのか？」

「ああ。ある意味神器の1つかもな」

・ 5回目

「あ、今度はサーヴァントだね……フード被ってる人みたい」

「術ニキ乙」

「え。待つて、術ニキってストーリー限定でしょ？ ピックアップとかにもあまり出ないから基本的にレアな立ち位置でしょそれをナチュラルに当ててるうう!？」

「どうどうっ！ よっちゃん、騒がないで！」

・ 6回目

「次は礼装演出だね。えっと……赤いドレス着た人だ」

「恋知らぬ令嬢おう……待つて、ここまでで星4以上は何枚出たのデスカ……？」

「孔明欠片フォーマル令嬢……4つだな」

「術ニキもレア度高いじゃない……実質5つ、外れナシ……？」

・ 7回目

「サーヴァント演出だな。あ……金演出」

「この期に及んでまだ殺しに来るといふの!? 術ギル!? しかもよりによつて術ギル!?

フォーマルと相性抜群の術ギルですかそうですかあ!?

「うわあ……善子ちゃんがどんどんおかしくなつてくよ」

「よつちちゃんから見れば、涼くんの引きは神がかつてるようなものだからね……」

「いやあ、もう1つ山があると思うよ、私は」

「根拠は?」

「姉のカン、かな」

・ 8 回目

「あ。またサーヴァント……しかも金演出」

「なんで!? 2連続どころか3連続お腹いっぱいああああニトクリスううううう!

さっきのヒュドラ・ダガーがフラグだったはずなのになんでこっちに來ないのよおおお

おー」

「なんでキャスタークラスのニトクリスがセイバークラスで呼ばれるんだよ。おかしい

だろうそれ」

「にしても……すつごい格好だよねこの人。水着これ?」

「一応これでもフアラオだから。偉い人だから。不敬ですよつて怒られるから」

・ 9 回目

「次は礼装演出だねー。ってこれバイクじゃん！」

「モータード・キュイラツシエだな。前に善子が言ってたけどVMAXを武装したとか何とかって」

「」

「あの、肝心のよっちゃんがもう……」

・10回目

「また礼装だー。えっと、尼さん？ 見たいな人が地球を抱いてるやつ」

「魔性菩薩」

「よっちゃんが線画みたいに真っ白にいいいい!?」

「トドメ、刺されちゃったかー……」

※

「悲しい出来事だったね……」

と、明後日の方向を向いて憂うねーちゃん。いや、ただガチャ引いただけでなんだよ

そのリアクションは。

だがしかし、善子は俺のガチャ結果にオーバーキルされて梨子に支えられてやつと立っているという状態だが。

「……ところで涼、今回の引きはどんな感じ?」

「急にいつものねーちゃんに戻ったな……あー、まあそれなりいい感じじゃね? 星4

以上のサーヴアントが合計3体、同じく星4以上の礼装が4枚。上々な結果だろ」

「そんな引きでそれなりだなんて……これが持っている者の風格だとしても言うの……」

「よっちゃーん、しつかりー。大丈夫だよ、ただガチャで欲しいのが引けなかつたくらいで——」

「ただガチャで——なんですって?」

あ……梨子の奴、今地雷踏んだな。

地雷ワードに反応した善子がゆらあつと、幽鬼のように身体を起こして思わず小さな悲鳴を上げる梨子。髪が長いし前髪に目が隠れている様はどここのリングに登場する貞子だ。

「よ……よっちゃん? あの、なんだか怖いよ……?」

「ただ、引けなかつた……ふふつ、そうよねえ……やってない人から見たらそんな反応よねえ……うん——いいの、別に怒ってないし……リリーが言ってることは至極全うな反

応だもの。

でもやっている人から見たらそうじゃないのよねえ……ただでさえ辛い確率で引けること事態が奇跡みたいなものだし。まあ？ 中には?? さらりとなんてことの無いような顔して星5サーヴァントや礼装見せてふつつーな反応している人間もいるけど???

でもFGOって星3サーヴァントでも戦えるし、イベントで星4サーヴァント手に入る事だつてあるから不足気味つてわけじゃないし？ むしろ高レアほど育成難易度跳ね上がつて苦行だし？ あのランサーアルトリア（青）なんて大騎士勲章が合計110個も必要つて言う先が見えないどころかお先真つ暗な要求してくるし？ だから星4がコストと育成難易度含めてちょうどいいつて言うか、聖杯転臨でレベル上限解放出来るようになってむしろ星3以下が有利になつたし？ だから無理して星5を手に入れる必要なんて無いんだけどねえ……。

でもやっぱり愛着つて言うか？ 信念つて言うか？ やっぱり欲しくなつちやうのよね、星5サーヴァントが……でも私じや絶対通常のガチャじゃ引けないし、だからこの福袋が数少ない希望なのよ……だけど最初の福袋では本命モードレッドで出たのはオリオン、夏休み福袋はオルタニキ本命だけで出たのはナイチンゲール——つて、掠りもしないから一縷の望みを託したのに……。

あ、それでもやっぱりオリオンもナイチンゲールも育てたわ、当然スキルレベルも全部10にして。だって当然じゃない、数少ない星5で使い所理解しておけば強いもの………現にキヤメロットでバスターゴリラ相手にエウリユアレと一緒にボコボコにしてやったし、ナイチンゲールは支援バフのおかげで火力を底上げできるし……もちろんアルテラだって育てるわよ執念でスキルレベルも全部上げるわだってセイバークラス最強のATK値だしナイチンゲールと組んで文明破壊是非もないねっ!」

「り……涼くん、よっちゃんがおかしくなっちゃった……」

「いや、コレがおかしいのはいつもの事だが、トドメ刺したのは間違いなくお前だからな」

泣きつく梨子に淡々と返して、どうやってコレ鎮めるかなー、と思案。

と、その時同時に通知音が鳴って、俺はスマホを取り出す……鞠莉から?

《シャイニー★FGOで福袋? って言うのがやってたから、試しにやったらこんなの出ちやった! なんか強そうだよね、悪役っぽくて!》

と言うメッセージと共に添えられていたのは、モードレッドの画像……あ、ランスロットとガウエインまで引いてるじゃないか。

「

あー……」

スマホの画面を見たまま氷のように固まる善子に、何か声を掛けないとなあと思つて声を掛けようとする。

「まあ、アレだ。ドンマイ？」

「——やつぱりガチャは悪い文明なのよ！ この軍神の剣で運営を破壊してやるwきゅぶっ！」

「うわあつ！ よつちゃんがあー!?!」

「わー、見事な上段後ろ回し蹴りが決まったねー。しかも飛んで」

「今年も涼ちゃんは容赦無しか〜」

やべっ。つい手加減忘れて善子に延髄蹴りやっちゃった……卒倒したようだが大丈夫か？

……うん、呼吸もしてるし脈もある。気絶したただけだな。良かった良かった。

「いや良くないよね!?! 延髄に思いつき蹴りつて危ないよね!?!」

「そこはギャグ時空的なノリで大丈夫だ」

「うん、身もふたも無い話だけどね……」

「とりあえず善子ちゃん、チカのウチに運んであげようよ……」

その後、凄まじい勢いでアルテラの育成をした善子はわずか4日でレベルマスキルマまで完了させて、ドヤ顔でサポートサーヴァントの剣粹に設定していやがった……。

また後日。

「アイエエエ!? キング!? キングハサンナンデ!? りりりりり涼つ、代わりに引いてえーっ!」

「自分で引け……確か20連くらい行けたよな——あ、出た」

「なんでアンタばかり引けるのよそのふざけた幸運をブチ壊してやるわジーザスクラアアアイストツ!!!」

番外編（2） 伽藍の堂と打ち上げパーティー

「……………」

「なーに黄昏てんだ。似合わねーぞバカみかん」

「涼ちゃん」

どこに居るのかと思えば、こんな所に居たのか……人の居なくなつたのステージに立っているチカを見つけ、やっと見つけたことに嘆息すると近づきながらその背中に声を掛けた。

ほんの1時間前まで満員だった横浜アリーナ。今は観客もスタッフも完全に撤収し、残っている人間は誰も居ない。

「………凄いやね」

「あ？ 何が」

「チカたち、今日、ここでライブをしたんだよね。ここに来てくれたお客さんだけじゃなくて、ライブビューイングで世界中に居るA q o u r sのファンに、私たちのパフォーマンスを見てもらつたんだよね」

「今更何言つてんだ？ 頭でも打ったか？」

「えへへ……打ってはいないけど、今でも夢の中に居るみたいで足元がふわふわってしてる気がする」

「安心しろ、ちゃんとお前の足は2本とも地面に着いてっから」

「そーじゃなくてさあ……涼ちゃんって幽霊とか見えるのにリアリストだよ」

チカの隣に立ちながら答えていると、俺のリアクションにチカはぷくつと不満そうに頬を膨らませる。

相手が幽霊や妖怪だろうと、見え、触れ、言葉を交わせるんだったらそれは現実だと認識するしかないだろうが。つーか皮肉だつてのそれ。

「皆……楽しんでくれてたかな」

「……逆に聞くが、そう言うお前はどうかなんだよ？」

「チカは……すつごく楽しかったよ。こんなに大きな会場で歌って、踊って……本当に楽しかった」

「ならそれが答えじゃねーの？ 自分たちが楽しくない物を見せたとして、それを見るギャラリイも楽しめるワケがねーし」

「そっか……そうなんだよね。そうだと、いいな……」

……なんか、こうも大人しいとオレの方が調子が狂ってくるな。

まあチカはチカでA q o u r sのリーダーとしての重圧を背負いながらこの2日間

をやりきったんだ。感慨深くもなるか。

それに実際、オレが見る限りの範囲でもA q o u r sのパフォーマン스에笑顔を見せている奴しか居なかったし。

「ねえ、涼ちゃん。涼ちゃんはどっだったの？」

「何がだよ」

「チカたちのライブ、楽しんでくれた？」

「あー……まあ普通」

「ええ……そこは「凄かった！ 感動した！」って言うてよ」

素っ気無い返しにチカはしよげて、アホ毛までしなうてしまう。

まず、チカの例えはオレのキャラじゃねーから絶対に言わない。あとそう言う感想を期待もするな。

「知るかよ。んな事より皆がお前の事探していたんだよ。さっさと合流するぞ」

「はあ……い……」

意気消沈したチカはがつくりと肩を落としたまま、とぼとぼとオレの後ろについて歩いてくる。

………つたく。メンドーなヤツだなこの幼馴染は。溜息と共に俺は足を止めた。

「——凄く、良かった」

「……………ふえ？」

「ほら、さつきと行くぞ」

きよとんと見上げるチカを無視し、再び歩き出す。

しばらくポカーンと間抜け面を晒していたチカだったが、徐々に嬉しそうな顔をしてくると俺の隣に駆けてきた。

「ねえねえつ、今なんて言ったの!？」

「なんにも言ってねーよ。空耳だろ」

「言ったよ！ 確かに涼ちゃんが言った！ ねえ、凄くなに？ 本当にそう思ってるの!？」

「ツ……………つさい黙れ。それ以上言うとは絞めるぞ」

「ねくえくくくつ！ お願いだからもう一回言つて……………ぐえつ！」

「ああ、言つてやるさ。それ以上言うとは絞めるつてな」

「そつちじや、ない……………つて……………！ ちよ、絞まつてる絞まつてる、本気で絞まつてるうううう！」

騒ぐチカをヘッドロックを掛け、そのままの状態で引きずつてホールを後に。

ああ、さつきのは気の迷いだ。言つてやるんじや無かった本当に！

腕をタップするチカの懇願は一切聞き入れず、かと言つて失神させないように絶妙な

力加減で絞めたまま皆が居る場所へ引きずって行った。

……その後、解放されたチカがまたも虚言を吐こうとしていたので、手加減無しの上段飛び後ろ回し蹴りでKOしたのは言うまでも無い。

※

「えく……横浜アリーナ2デイズのライブ、途中アクシデントもあった物の、どうにか建て直し総じて成功といっても良い内容で終了し——おい、何でオレが音頭とんなきやなんねーんだ」

「それはほら、どこかの誰かがリーダーを上段飛び後ろ回し蹴りでKOしちゃって出来なくなっちゃったから」

打ち上げ会場で何故かオレが音頭を取ることになり、渋々やりながらもやっぱりこれはおかしいと思いついて思わず突つ込んだ。

そうしたら曜の冷静かつからかうような突つ込みにオレはあからさまに舌打ちをす

る。

「……時に曜はまだまだ物足りないようだし、その辺全力で走ってきて構わないんだぞ？　むしろやって来い」

「りよーうー、せっかくの打ち上げなんだしそう言うのはナシ。良い？」

「チツ……えー、長つたらしい挨拶も苦手だし面倒くさいし、じゃあこのままなんかを祝して乾杯」

『何の脈絡もなしに乾杯しちゃった!?!』

うっせー。何で当事者じゃないオレがリーダーの代理でやらなきゃ行けないんだ。そんなのが欲しかったらリーダーが復活した後に言わせてやれ。

肝心のリーダーは隣で未だにのびているが。手加減無しで後頭部に直撃したし、当分意識は戻らないだろうが。

「……未だに思う事があるんだけど、いつも涼くんにあんな風にされるのに、千歌ちゃんも曜ちゃんもよく今まで幼馴染が続いてるよね……」

「お前だつて気づいてるだろ梨子。このバカみかんには並みのツツコミじや止められないって。そして類友と呼ぶべきか、曜もスイツチ入るとと並みのツツコミじや通じない。だから手っ取り早く物理的に沈めるしかない」

「むしろりよーくんがそうするから、チカちゃんも段々暴走がレベルアップしていった

んじゃ……」

ボソリと呟いた曜の呟きが聞こえてジロリと睨むと、慌てて目を逸らしてジュースを飲むフリをしてごまかしていた。

一言言つてやろうと思つたが、唐突に鞠莉がオレの隣で失神しているチカをひよいと退かしてしまい、その空いたスペースにちゃっかり割り込んでくる。

「はい、チカっちはちよーつと退いてねー。ねー涼、私たちのライブはどうだった？
楽しかった？」

「別に。普通」

「んもくう、涼つてばドライすぎよ、おねーさんに素直に告白してもいいのよ？」

「誰がするか。つか、アンタはオレの姉じゃねーだろ」

「じゃあガールフレンド？」

「話が飛躍しすぎているしお断りだ」

「ひつどーい！ 私のどこがダメなのよ？」

「俺が特殊部隊の元兵士仕込だつて理由だけで何の根拠もなく出来ると断言し、ヘリボーンやらラペリングやら拳銃の果てにはエアボーンするからだ」

「でもできたじゃない」

出来なきや大惨事だから成功させるつきやねーだろ……！ 悪びれずにこてんと首

を傾げる鞠莉に、口にするのも面倒だから心の中でツツこんだ。

説明を受けただけで、練習無しのぶつつけ本番なんて普通やらねーよ。しかもラペリングにいたってはそのままホテルの外側から窓拭きまでさせられるし。（無論バイト代は出た。諭吉さんが30人とか言う高校生のバイト代としては桁が違う額だったけど。金持ちってほんつとにこえー）

「鞠莉さん……さつきから貴方は何をやっているんですの？」

「何って、リヨウに熱烈アプローチだけど？」

「まったくアプローチになっついていませんですわ……」

「じゃあダイヤがお手本見せてよー。このクール&ドライのツンデレをデレさせてみてよー」

「なぜわたくしがそんな事をしなければいけないんですかっ！」

そうそう、むしろダイヤさんはデレる側だろ。

「飼い主が来たんだからいい加減引っ付くな離れろ」

「誰が飼い主ですかっ！ ほんつとーに口の悪さは直りませんわね！」

「涼が本音トークしてくれるまで離さない〜！」

ガミガミと口煩く小言をマシンガントークするダイヤさんの話は適当に聞き流しつつ、腕にしがみついている鞠莉を引っぺがそうとするが、中々剥がれない。アンタそれ

胸が当たってただけど気づけよ。

が、鞠莉の背後に立ったねーちゃんがその首根っこを掴んで持ち上げると、猫みたい宇宙吊り状態になった。

「鞠莉、その辺にしようか？」

「……イエス、ママ」

「ダイヤも、今日くらいは大目に見てあげてね？」

「わ、わかりましたわ……」

ねーちゃんの鶴の一声で2人も完全に大人しくなって、そのまま3人は自分たちの席に戻る。そっか、本当の飼い主はねーちゃんか……しかし戻る途中、なんかねーちゃんがじつとこつちを見ていた気がするんだが、あれは何の意味があったんだろう。

……まあ、何だっがいいか。つーかあれだ、俺は大して関わっていないんだから、盛り上がるならお前たちで盛り上がればいいじゃ——

「リヨウウウウウウウウウウウ！」

「はっ……!!？」

やつと落ち着けると思った矢先、誰かが飛びついてやがった。

考え事をしていてたいせいで反応が遅れてしまい、飛びついてきた誰か諸共倒れこんでしまふ。

「いったい誰だ……としかめつ面で見上げると、涙目になった善子がオレの上に乗っかってた。」

「り、涼くん大丈夫!? よっちゃんも急にどうしたの!？」

「お願い、ガチャ引いてっ! 新宿のアヴェンジャー欲しいのっ!」

「……善子ちゃん、さつきから妙に静かだと思ったら……」

「ずっとゲームに集中していたっら」

いや、善子の大人しかった理由に関してはどうでもいいんだルビイにマルよ。むしろ大人しいならそれはそれでオレの心の平穏が保たれている証で……いや、それより新宿のアヴェンジャーってなんだ——ああ、F G Oか。亜種特異点で出る新しいアヴェンジャーが通称そうだったっけ。

「自分で引けよそんなの……」

「引けないからこうして頼んでるんじゃないっ!」

「結果、お前の邪念が邪魔をして引けないパターンだな」

「む……無心になるわよ」

「煩惱の塊である廃課金プレイヤーが言っても説得力が……ああ、いや。そう言えばだな、前にF G Oのラジオ聞いていた時にニトクリス役の人が踊ったら目当てのオルタナキを召喚した、って話があるぞ」

「それは本当なの!?——やるわ、今の私なら何でもやる!」

いや、それはまったくの偶然……マシユの中の人もラジオ終わってから踊って巖窟王を出した、って言うけどやっぱりそれはまったくの偶然引けたただけだろうし。

しかし今の善子は完全に踊るつもりらしい。まあ、別に俺が課金して引くわけじゃないからいいか。

「新宿のアヴェンジャー……この墮天使ヨハネの元に、出ませい! 出ろ〜出ろ〜」
』

……おい、それは何だ善子よ……。お前が普段やっているなんちゃって儀式か何かか? お前、昨日今日と横浜アリーナを満員にして全世界にライブビューイングを発信していたスクールアイドルだよな?

善子のやっつている筆舌にし難い奇妙な踊りを目撃し、気絶しているチカ以外の全員が絶句していた。無論、俺も名状しがたいそれには言葉を無くしていたが、我に返るとピックアップガチャを選択して10連を回す。

とりあえず演出諸々はスキップしていつて……。あ。

「おい、善子。おめでとう」

「っ! もしかして来たの!? 本当に?!?」

「ああ、来たぞ——アラファイフおじさんが、な」

初老の紳士が映っている画面を見せつける。

新宿のアーチャー。通称アラファイフおじさん。期間限定の星5アーチャーが。

「（ぼたり）」

「善子ちゃん…膝から崩れ落ちちゃったよ……」

「そのまま真っ白になっちゃったぞ……」

「アラファイフおじさんは期間限定なんだから喜べば良いだろ」

「何故、こんな時に限定鯖を引けるの……これが踊りの効果だというのデスカ」

いや、そう言ったのって結局タイミングが旨く重なった結果来たってだけだし迷信だろう。

確か色々あったよなー他にも……欲しいサーヴァントを描いたら出たとか、極大成功したら出た、マ〇イア梶田教に入ったら出たとか云々……。

まあ、全部信じてないけどオレ。

「何はともあれ星5ゲットおめでとう」

「あんまり嬉しくない……わよ」

星5当たったのに我俣だなお前。お前は特に星5が欲しくてたまらなかつただろうに。

「今欲しいのは新宿のアヴェンジャー！ アラファイフおじさんじゃないのっ！ もちろん」

ん育てるけど!!」

「なんだかんだ言いながらも喜んでるじゃねーか」

「とーぜんよ、星5アーチャーは男性特攻のオリオンだったし、使い勝手ならアラファイフおじさんの方が上なはずだし!」

そう言えばお前って星5弓枠はオリオンしかいなかったんだっけ。確かに局所的なオリオンよりは適応範囲は広そうだが。

「まあ、アレよ。不本意とは言え星5サーヴァントを引いてくれたし、お礼は言っておくわ。ありがと」

「へいへい……ほら、気合入れて育てるんだな」

「勿論よ。……何気に星4礼装も2つあるし。破音ってこれで限凸できたはずよね……コスト面で考えればリミゼロよりも……あ、エミヤやアルジュナと同じアーツ3枚構成なんだ。だったら……」

早速編成を考え出す辺り、コイツもう抜け出せねーよなあ……かなり金も注ぎ込んでいるはずだし。

ライブに集中するために今までのプレイ時間から大幅に制限をかけて、最低限ウィークリーミッションとログボのみ回収することに専念してきた分、その枷から解放された今は思う存分やりたいんだろう。

「……………」

ふと視線を感じてそれを辿ると、またねーちゃんが俺を見ていた。

けど目が合うと、ふいとそっぽを向いて他との話に講じてしまう……さつきといいたい事があるなら言えっつーの。

※

打ち上げのどんちゃん騒ぎも終わり、ホテルに戻ると日付も変わろうかという時間だった。午前中は横浜を観光して、昼過ぎには電車に乗って沼津に帰る……って予定になっていた。

鞠莉とかが横浜観光しようとか誘っていたが、どうすっかなー。

「ねーちゃん、風呂は？」

「私はもう入ったから」

松浦姉弟と黒澤姉妹はそれぞれ同室になっていて、他も全員ツインで部屋を取ってある。

そも男女が一室に……って意見もあるが、そもそもオレたち血の繋がった姉弟だし。トリプルにしようがシングルにしようが結局一人余って、わざわざシングルを取るよりはツインの方が安く済むし。

それは兎も角として、そう言えばライブが終わって打ち上げ会場に行く前にホテルに戻って、各々シャワーだとか何とか何とかがってやったんだっけか。

「んじゃ、シャワー使うから」

「うん」

……やっぱりと言うか、ご機嫌斜めのねーちゃんに溜め息をつく。打ち上げの時からずっとこんな調子だよ。

訊いてみようとは思うが、先にシャワーを浴びてからにすっか……。

「——で、上がってきたらこうなってたわけだが」

誰に説明するでもなく呟いて、肩を落とす。シャワーから上がったら既にねーちゃんはベッドに横になっていた。

……つつーかそこ、俺の場所なんだが。

「おいねーちゃん寝るな。そこ俺の場所だつての」

「起きてるよ」

「なんだ、起きてたのかよ……寝るにしても歯を磨いてから寝ろつて」

「別に、まだ寝るつもりじゃないし」

「……なあ、ずっとふて腐れてるけどなんなんだよ?」

ずっと後回しにするつもりも無かったから率直に切り込んでいった。

オレの言葉に一瞬、ねーちゃんの肩がピクリと震える。どんな表情をしているかはここから伺うことはできないが、凶星を指されてふくれっ面にでもなってるだろう多分。

「……………」

のそのそと身体を起こし、そのまま膝を抱えて背を向けるねーちゃん。あー、本当に女って面倒くさいったらねーな。

「あのさ、オレに言いたい事があるんだったらハッキリ言えつての。何も言わないでずっとチラ見されたりするこっちの身にもなってくれよな」

「……じゃあ言わせてもらおうけど、涼つてずいぶんモテるようになったよな」

「……モテる? オレが?」

「チカも曜も仲がいいけど、どっちかって言うとな家族みたいなものだし。けどマルと知らない間に仲良くなっていたし、最近だと善子や鞠莉とずいぶん仲がいいし」

「マルはそもそも世話になつてる住職ンとこの孫娘だし、善子も鞠莉も遊び仲間みたいにしか思つてねーんだけど。え、つか何? ねーちゃんがご機嫌斜めになつていたのつてそんな理由?」

「そりゃあ…涼にとつては些細なことかもしれないけどさ、姉としてはなんか複雑なの。ツーンだ」

「ツーン」ってなんだよ「ツーン」って…子供じゃあるまいし。いや、まだ未成年だけどそんな事やる歳でもねーだろ…。

大体、ねーちゃんのその言い分って横暴じゃね？　そもそもスクールアイドルに巻き込んだのってねーちゃんたちだし、しかも浦女は女子高で顔合わせる相手は女子しかいねーんだし…。おまけに各々に抱いている印象も口にした通りだ。マルは世話になつて住職の孫娘だから必然オレが視える事を早くに知るし、善子はなんだかんだゲームの趣味が合うから気兼ねなく遊べる。鞠莉は…なんつか気に入られてるんだよなあ。無理難題を嬉々として要求してくるから苦手なんだがオレ。

「つっつかなに？　ねーちゃん嫉妬してんのかつと」

「別に、嫉妬なんてしてないから！」

ふと気づいた事を口にしかけると、振り向き様にねーちゃんは枕を掴んでオレに投げつける。けど身体を傾けてあつきり枕を避けると、空を切ったそれはそのままドアに当たって床に落っこちた。

耳まで赤くして、ムキになって否定って肯定しているようなモンだろ…つっつかねーちゃん、普段のキャラが崩れてんぞ。

「んじやーどうしろって？ あいつらと距離でも取ればそれで満足？」

「そんなんじやないよ……ただ、涼がなんだか遠くなつたつて言うか……」

「オレは特別何かが変わつたとは思つてねーけど」

「……本人は無自覚、つてよく言つたものだよね。気づかない内に変つたのか変えられたのか……」

「オレは松浦涼で、ねーちゃんの弟。他に要るか？」

「うーん……やつぱり涼は涼、なのかなあ」

だから言つてんじやん、と首を傾げるねーちゃんに言い放ち、枕を拾いに行つてからベッドの縁に腰を下ろす。

いい加減自分のベッドに移つてほしいんだが……移る気は無さそうだ。

「ねーちゃん、昨日今日とライブで疲れてるだろ。さつさと寝たらどうだよ」

「んー、疲れてはいるけどもう指一本も動かないつて程じゃないし」

「あー、確かにあと100曲はこなせるとか余裕こいてたからなー。まずAqoursには100曲も持ち歌無いのに」

「アレはまあ、例えみたいな物だよ。それより……」

「んだよ……あの、何してんですかねーちゃんは」

「何つて、涼にハグしてるの」

「いや……なにゆえ？」

「そう言えば涼から感想貰ってなかったなって。私たちのライブはどうだった？」

「いや……だから普通としか……」

「千歌だけ本音漏らしたのに、姉には話してくれないんだ」

くっそ……勘付かれてる。うっかり漏らすんじゃないかった。

「だったらチカに聞けばいいだろうっ」

「涼の口から直接聞きたいの。私たちあんなにがんばったんだから、素直な感想を言ってくれてもいいでしょ？ 言ってくれるまでずっとハグしてるからね」

くっくっ！ わーったよ、言えばいいんだろっ！ はいはい良かったですよ本当に！
心底から！ これでいいだろっ！」

「本当にいく？」

「疑うならバカみかんにも言質取ってみろよ！」

「それなら後で聞いておこうかな。涼って本当に捻くれてるんだからなあ」

「捻くれ者で悪かったな！ それより離れ……って何で一層密着してんだよっ！」

「んー、お礼のハグ？」

「それはもういいっ！」

結局……ねーちゃんの機嫌は良くなった物の、おかげでしばらく離れようとしなかつ

た。